

60318

教科書文庫

6
810
34-1951
01304
49756.

Kodak Gray Scale

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

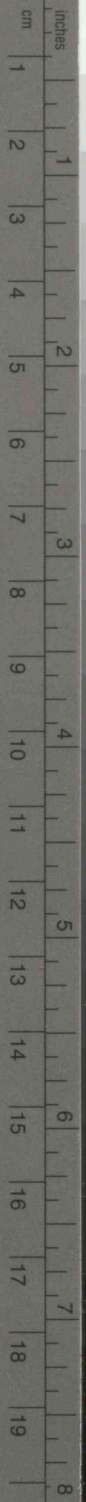


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

- Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教
34
013

文部省検定済教科書

2	小国 516
東書	



TIA7
1K9
2

柳田国男編
新しい国語

五年下

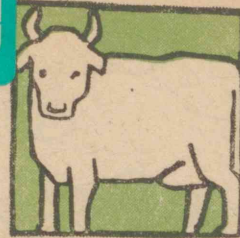


教科書文庫
6
810
34-1950
0130449756



新
しい
国
語

五
年
下



昭和二十五年八月十二日 文部省検定済
小 学 校 国 語 科 用

広島大学図書

0130449756



東京書籍株式会社

中央図書館

広島大学図書

0130449756





もくろく

一 みんなそろって……………四

(一) 大漁

(二) まめ運び

(三) 私の日記

(四) 炭こうのようすを工場へ

二 みんなの橋……………二十一

三 発表会……………三十二

(一) かの発生

(二) 三つの家

(三) あて名のない手紙

四 雪国……………六十五

(一) 冬がれ
(二) 冬じたく
(三) 雪

五 本ができるまで……………九十三

六 ことばと文字……………百十五

(一) 音声と文字

(二) 漢字

(三) かな

(四) ローマ字

七 小人の国……………百三十一

ふろく 新しく出た漢字……………百五十二

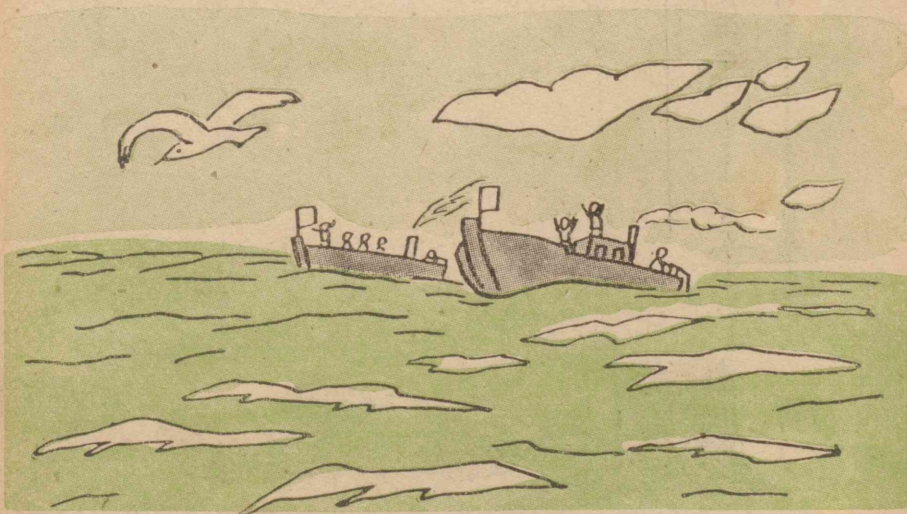
勉強の手引……………百五十三



一 みんなそろって

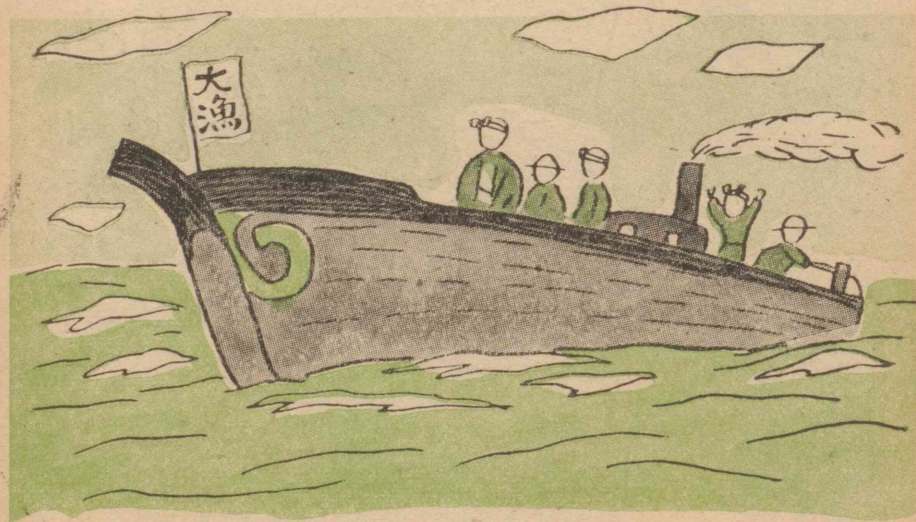
(一) 大漁

父が帰って来た、
兄たちが帰って来た、
日焼けした顔を
ほころばせて。
船が帰って来た、
海幸を積んで、
みよしに大漁の旗を立てて。



待つ者、むかえる者は
手をふりながら
「おうい」とよぶ。
「おうい」と
どの船からも答える。
「たくさんとったぞう。」
「大漁だぞう。」

おだやかにないだ海、
夕焼けのあかね空。



はまはにぎわう、
よろこびの声々で。
待った父や兄たちが
帰って来た。
海幸を積んで
船が帰って来た。



(二) まめ運び

リヤカーに積んで、
家へどんどん運ぶまめがら。
まめがらが輪にすれて
パチパチ鳴る。
おもしろくなって足を早める。
うしろを向くと、
父がまめがらをふり上げながら
わらっている。
ぼくはなお走る。
まめがらが鳴る。



(三) 私の日記

十月六日 (水) くもり 二十二度

私たちの待ちに待ったやぎが学校に来た。「きょうは、みなさんのやぎが来ますよ。」と、先生がおっしゃったので、みんな朝からまどの外ばかり気にしていた。十時ごろトラックが校門をはいって来たので、「やぎだ、やぎだ」と言っておさわいだ。先生のおゆるしが出たので、みんな運動場へ走って行った。

おじさんたちが、白いやぎをだいて、トラックからおろしたみんながさわぐので、赤いかわいい目で、はずかしそうに私たちを見ながら、からだをすり寄せてかたまっている。とてもよくちちが出る種類だと先生がおっしゃった。ちぶさが地面にと

どくほど大きくたれているもいた。

草をちぎって投げてやったが、食べなかった。知らない顔ばかりなので、こわがっているのかもしれない。ふいに、一番小さいのが「メエ」と鳴いた。「鳴いた、鳴いた」と言ってみんなが喜んだ。

私たちは、早くあのやぎたちとなかよしになろうと思った。

十月十一日 (月) 晴 二十三度

きのうかっておいた草を持って、やぎ小屋に行くと、やぎはもうすっかり私たちになれて、おし合って食べに来た。

きょうは私が当番なので、みんなが持って来た草を受け取って、ひなたにひろげた。かわいた草を、なやにしまつて置いて、

冬の間のはえたおすが一頭いる。



これは長いあごひげなんかはやしていて、ひとりでいばっている。ほかのやぎが来ると、すぐ頭でぐんぐんおし返す。「あすから、このおすは別の小屋に入れよう」と、先生がおっしゃった。

あとのやぎはみなおとなしい。小さいしっぽをびよこびよこさせて、寄って来る。頭をなでてやると、喜んでじっとしている。私はやぎのせわをするのがすきだ。

十月十九日 (火)

晴

十九度

けさは冷たい風がふいて、寒さが身にしみるようだった。ポプラの葉が、運動場いっぱいには散っていた。

「みんながよくやぎのせわをしてやるから、きょうはやぎの方からお礼をくれるそうだ。」と言って、先生は新しいバケツをさげてやぎ小屋へ行かれた。みんなはにこにこしてついて行った。一番大きなやぎのちぶさは、はちきれそうにふくらんでいた。先生はそのちくびを両手でにぎってしぼられた。白いちちが、チュウチュウとバケツの中へはいる。みるみるバケツがいっぱいになってきて、白いゆげがもやもやと立つ。

みんな、コップに一ぱいずつそのちちを飲んだ。あまくて、

少しあたたかい舌ざわりで、なんとも言えない味がした。
これから一日おきに、やぎのちちが飲めるのだ。私たちはい
っしょうけんめいに、やぎのせわをしなければならぬ。

十月二十三日 (土) くもり後晴

二十度

八時に駅前が集まった時は空はくもっていたが、ラジオの天
気予報はやがて晴れるというので、電車で、学校の農場へ行っ
た。私は、おとなが使う大きなリュックサックを持って行った
ので、みんなにわらわれてしまった。

私たちがいも畑へ着いた時は、秋晴れのよい天気になってい
た。六月に私たちの植えたさつまいものつるが畑いっぱいひ
ろがっている。この前に草取りに来た時よりも、ずっとしげっ
ていた。

葉をおし分けて、いもづるの根もとをほると、やわらかい土
の中に、かたいいもが指先にさわる。
力を入れてぐいとぬくと、大きない
もがぽっこりと取れた。つるをたど
ってほっていくと、いくつでもある
けれども根もとにあるのが一番大き
くて、末になるほど小さい。
大きいのをほり当てるごとに、み
んなで見せ合って、わあわあはやし
たてた。細長いがあると、ねずみ
のしっぽのようだと言って、みんな



でわらった。顔を土まみれにして、ふざける者もいた。お昼までに、ずいぶんほった。

めいめいのリュックサックへ分けてもらってから、小川へ手をあらいに行った。すきとおった水が、ひやりと冷たい。いくらあらっても手に付いたものしるが、まっ黒にこびりついてとれなかった。

おべんとうがすんでから、公一君が、「やぎに、いものつるを持って帰ってやろうじゃないか」と言った。みんなは賛成、賛成」と言って、やぎのおみやげをこしらえた。私の大きなリュックサックが、役に立った。

みんなはいもをせおって、「メエメエ子やぎの歌を歌いながら、元気よく家に帰った。

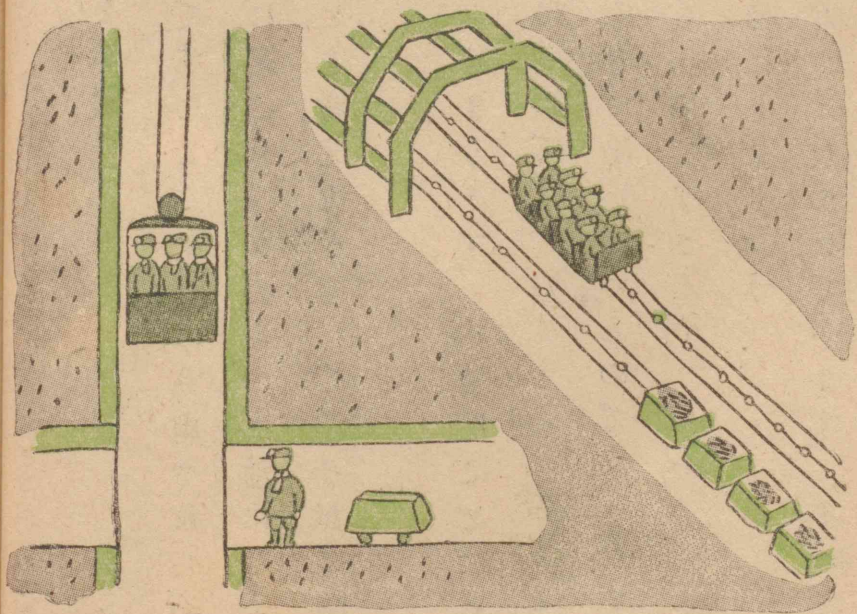
(四) 炭ここのようすを工場へ

私の住んでいる所は炭ここの町です。ここからほり出された石炭が、貨車に積みこまれて工場に運ばれ、私たちの生活になくてはならない品物を作り出すことを考えながら、この手紙を書いていきます。

炭ここの作業は、朝の七時から始まります。八時間ごとに代わり合っては、夜も昼も働き続けるのです。たくさんの石炭をほるためには、人も機械も、休みなく働いているのです。子供はここの内にはいって行けないので、おとうさんや、にいさんから聞いた話を、お知らせすることにしましょう。

石炭はそうになって、岩石の間にはさまれています。それで

石炭をほるには、まず炭そうが地上に顔を出している所から、それにそってほり下げます。炭そうはたいていななめになつていて、しゃこうといわれます。このしゃこうには、三十メートルごとに水平なこう道を左右にほり、ここで石炭を取るのです。また時には、地上からいどをほり下げ、ここを元として石炭を取ることもあります。このいどは、たてに深くなっているので、



たてこうといわれ、六百メートル以上のものもあります。それですから炭こうの地下は、たて横十文字にあなが通っているわけです。

この暗い地下のこう道には、電燈線が引いてありますから、それほど不便なことはありません。また、こう夫さんたちは、ぼうしにキャップランプを付けているので、どんな所でも歩けます。カンテラをさげていたむかしのような不便やきけんは、なくなつたわけです。

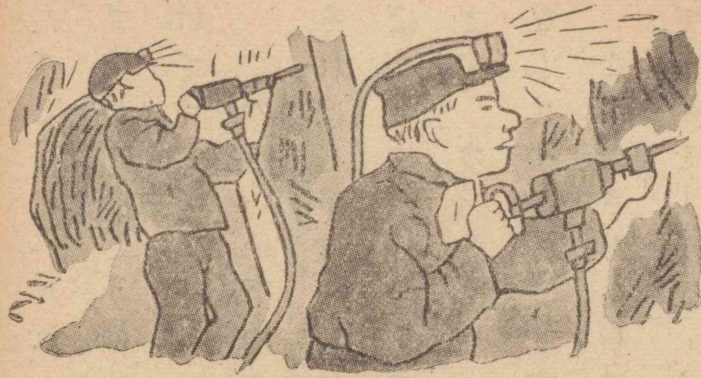
こう夫さんたちは、こう道のおくにはいって、石炭のほり場で仕事をします。ここを「きり」はとよんでいます。「きり」は冬はあたたかく夏はすすしく、一年じゅう温度の変化がありません。こう道の「きり」は「では、まずさく岩機で、炭そうのある所にあ

なをあけます。そこにダイナマイトをしかけて、岩石をくだいてから、つるはしを用いて石炭をほるのがふつうです。この仕

事はほねがおれるので、よほどからだが強くないと続きません。ここで働く人のうち、仕事になれた人をさき山、そうでない人をあと山といいます。ここが炭この第一線というわけです。

ここでほり出された石炭は、炭車に積みこまれます。炭車はこう道をおして運ばれ、さらにエレベーターでこう口に引き上げられることとなります。

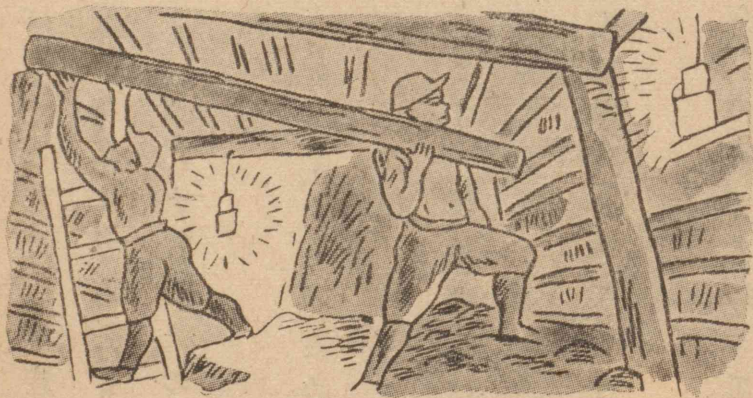
こんなふうに言ってしまうと、たいそう



かんたんに石炭がほり出されそうに思われますが、実際は、口で言うようなものではありません。

石炭をほり取ったきりは、岩石が落ちないように、まる太や材木でわくを組んで、こう内を固めていきます。今では鉄のわくも使われるようになりました。

また保安係の人は、いつも炭そのの重さや、風通しのぐあいや、ガスの発生などを調べて、こう内のきけんを防ぐことに努めています。しかし、こう内のばく発で、尊い人命を失うようなことがまだあるのですから、油断はできません。



こう口に運ばれた石炭には、岩石がまじっているので、選炭場で、よくより分けれます。石炭がいよいよ貨物列車に積みこまれて、工場などに運び出されるまでには、ずいぶん大勢の人の手を経なければならぬのです。

炭こう町でも近ごろは、音楽やえい画もさかんで、そのためにりっぱな会館も建っているという有様です。運動は、野球が人気をよんでおり、職場ごとの大会も行われます。厚生部では、洋服やラジオ、くつとか時計などを、安く売ってくれ、また修理もしてくれます。衛生医療イロクの設備もだんだん整ってきて、今では手術室までできています。

石炭が、国として大切なものであることは、だれでも知っていることです。ことに工場では、首を長くして、石炭の来るのを待っていることでしょう。私たちは、子供ながらも、できるかぎり力を合わせ、少しでも多くの石炭をほり出すようにしたいものだと思がけています。ではまた、めずらしいぼんおどりのも様や、秋の運動会のはがらかなちゃめぶりなどをお知らせいたしましょう。

二 みんなの橋

公一は、このごろ、朝ねむたくてたまらない。

「あんまり夜ふかしをするからですよ。」

ど、おかあさんがけさ起す時に言った。夜ふかしをしたのは、算数の復習をしたからであつた。公一は算数がよくできないの

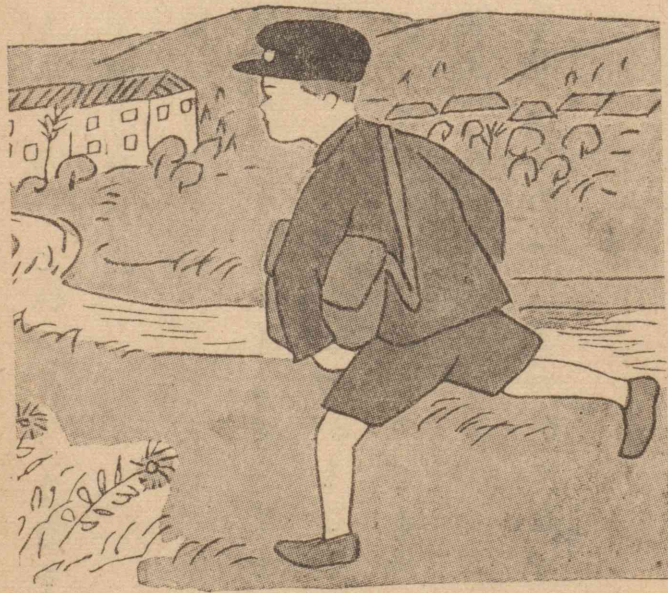
で、みんなに負けまいと復習をいっしょうけんめいにしたのであった。

ところがつくえに向かつて、きれいな算数を始めると、ひとりであくびが出てきてまぶたがしだいに重くなってくる。これではいけないと、目をこすって数字を見つめていると、知らぬ間に数字がありになって動き出していく——と思うと、こくりといねむりで頭がおじぎをする。こんどは、ねむけがましに深きゆうをして、しばらく復習を続けているが、やがてまたねむくなってしまう。しまいにはつくえにもたれてねむってしまった。ふと目がさめて、おどろいてねどこの中へもぐりこんだが、けさもねぼうをしてしまったのだ。

朝食もそこそこに、いっしょうけんめいに走り出した。公一

の家から学校までは二キロある。徒歩だと二十分かかるが、走れば十分で着けるにちがいない。もう道には生徒のすがたはひとりもなかった。出会うおとなたちは「おねぼうさん」と言っているような気がした。いやそれどころか、木の上のからすたちまで「ねぼすけ、ねぼすけ」とはやし立てて鳴いているように聞えた。

学校が近くなった。そこにははばニメートルほどの川が流れているので、橋まで五百メートル回り道をしなければならぬ。急げ、急げ、前よりもスピードを出すと



かばんの中の筆入れが「ちこくだ、ちこくだ」というような音を
立てた。とうとうかねがカンカンと鳴り始めた。

「しまった——」

がっかりして公一は走るのをやめた。今からいくら走っても
もうちこくなのだから歩こうと思った。けれどもせつかくここ
まで走って来たのだから、ランニングと同じようにびりでも走
り通す方がよいと思ひ直して、また走り出した。

教室にはいると、みんなが公一を見た。公一はまっかになっ
て、

「となり村までお使いをして、おくれました」と、
と、先生にうそをついた。

「ご苦労さん、どの辺でかねが鳴ったかね」

「橋の近くで鳴りました」

「こんどは正直に答えた」

「それはおしいことをしましたね」

授業が始まった。公一はうそをついたのが気になって仕方が
なかった。先生は公一を信用してくださるのに、公一は先生を
だましたことになる。いやな気持であった。が、今になって先
生にあやまる気持にもなれなかった。すると、その勇気のない
自分がよけいにいやになった。

もちろん公一は、うそをついたのは悪いと思った。そして、
朝ねぼうをしてちこくをしたのも悪いと思った。これからは決
してしまひと思つた。

しかし、ふと考えてみると、もしもあの時、橋がもつと近く

にあったならば、回り道をしないからちこくをしなくてもすんだのにちがいない——と思った。

「五百メートルの半分の所があれば、ぼくだけでなくてみんなが大助かりだがなあ。」

公一の学校は五百三十七名いるから二百五十メートルだけ毎日短くなるとしたら、いったい全部でどれだけになるだろう。さっそく算数だ。なんべんもかけ算をし直して、やっとでき上がった。

「そうだ、往復するから五百メートルだ。」

公一はびっくりした。なんとという大きな数字だろう。どんな小さな橋でもよいから、もう一つかければそれだけ便利になる。みんなは歩くのが少なくてすむから、それだけほかのことに

力をそそぐことができる。

「よし、橋をかけよう。」

と、公一はつぶやいた。

一日でさえこんな大きな数字が出るのだから、一月、一年だったら、地球を一周するかもしれない。公一は橋の設計図を作ってみた。これも算数が必要であった。まず川のはががニメートルとして、橋に使う木は三メートルなければいけない。大きい木を二本かけて、その上に小さい木をずらりと横にならべる。そしてその上に土をかぶせて固める。

木はうら山で切ってもよいと父が許してくださった。公一ひとりの力ではとても木が運べないので、友だちに話して応えんをしてもらうことにした。

日曜日、朝食をすますと、みんなは集まった。うら山のま
つ林に行つて、のこぎりてまつの木をひきたおすと、えだを落
して三メートルの長さに切つた。それにロープを付けてみんな
がかりで、エンヤラコ、エンヤラコとかけ声をかけて引っ張り
始めた。しかし、木は重くてなかなか動かない。下級生や女子
たちも手つだいに来た。とうとう動き出した。ワツシヨ、ワツ
シヨと力を合わせて、川まで引っ張つて来た時はお昼前だった。
みんなははらべこだった。それで午後から橋をかけることに決
めた。

ところが午後になつて、みんなが集まつたが、かんじんの重
い木を向こう岸までわたすことができない。川は一メートル五
十センチの水深で流れがきついからはいるとあぶないのだ。

「残念だなあ」

「おとなにたのもうよ」

「だけど、せっかくぼくたちの力でここまでやったのだから、
ぼくたちだけで橋をかけたらいね」

と、公一はうでを組んで考えこんだ。

やがて公一の思い付きで木のはしにロープを付けたのを川向
こうに投げて、みんなは下流の本橋をわたつて向こう岸から引
つ張ることになった。

「もし木が川へ落ちたらどうする」

「だいじょうぶだよ」

と、公一は自信ありげに言ったが、ほんとうは心配だった。

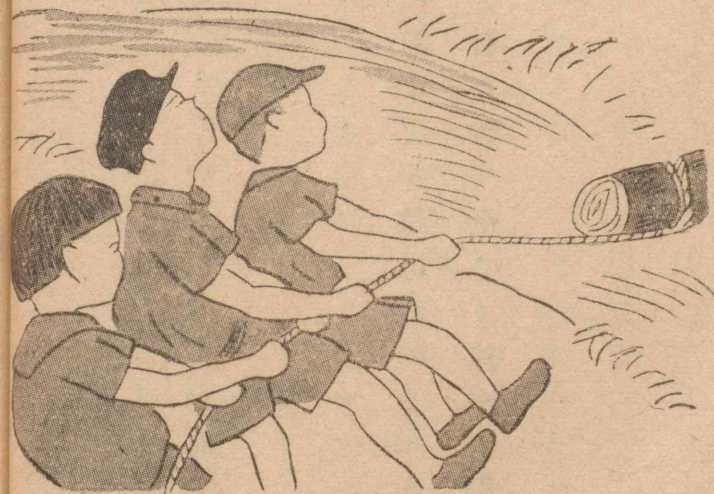
一、二の——三で、みんなは力をそろえて引っ張つた。木は

半分ほど川の上に出た。すると、みんなが引つ張る力よりも木が川に落ちる重さが強くなってずるずる川に落ち始めた。

「ほら今だ、ワツシヨ、ワツシヨ。」

みんなは、顔をまっかにして運動会のつな引きの時よりも力を出した。木は、水に頭をひたしたが、みんなの一つになった力で、またもや持ち上がって来た。そしてみごとに岸から岸へわたされた。みんなは思わず手をたたいた。二本目は、こつがわかったので前よりも楽だった。

その上に小さい木をならべると、



みんなて土運びを始めた。それはひとりずつ一列にならんで古いバケツに入れた土をリレー送りにするのだ。小さい手から手へ、バケツはまたたく間に運ばれていく。土をかぶせた上をみんなは足でふんで固めた。

「やあてきた、できた。」

と、みんなはなんべんも橋をわたって喜んだ。

公一は木をけずって、橋のたもとに「みんなの橋」と書いて立てた。

次の朝、ねぼうをしようにも、早く橋をわたってみたくて、目がさめてしまった。公一は橋ができてうれしかった。けれどもももつとうれしいことは、算数がすきになったことだ。そしてうそをつかなくなったことだ。

三 発表会

(一) かの発生

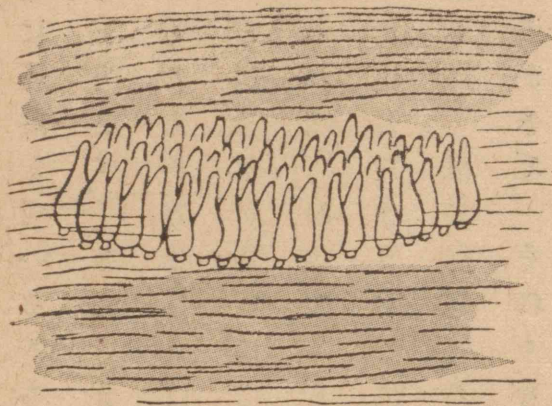
ぼくはこれから、ことしの夏にした、かの発生についての研究を発表したいと思います。

七月初めのある日のことでした。夕食後、えん側で休んでいると、かが一びき飛んで来て、ぼくの足に止まりました。そして頭を下げ、けんのような口の管で、足をたたくようにしていました。たたきつぶしてしまおうかと思いましたが、おもしろいので、がまんして見ていました。やがて、かは前足を動かしながら、管をぼくの足にさしこみました。後足を上げて血

をすっているのを、じつと見てみると、だんだんおなか赤くふくらんできました。なんとなくむずむずしてきます。ぼくはコップをふせて、かをつかまえました。そして、そのコップに半分ぐらいの水を入れて、布でふたをして置きました。

一週間ばかりたって、コップを見ると、コップの水面に、たまごが集まってういていました。たまごの数は、だいたい二百五十から六十ぐらいありました。形は細長くて、○七ミリぐらいの長さです。

それから二日目には、小さなぼうぶらがたくさんかえっていました。さか



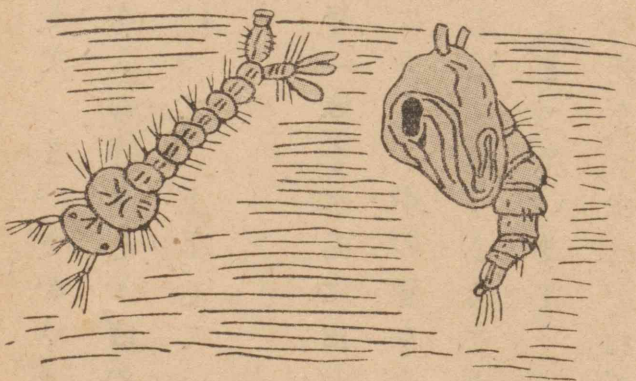
んに運動しているのもあれば、たまごの下にくつついてい
るものもあります。また、まだたまごからぬけきらないで、もが
いでいるものもあります。ぼくはこのぼうふらを、二十びきずつ二
つに分けて、かた方には水道の水を入れ、もう一方にはたまり水
を入れて、かってみることにしました。

水道とたまり水とに分けてから三日目には、水道の水のぼう
ふらは、ほとんど死んでしまいました。生き残ったのはわずかに
五ひきで、それも育ちが悪く、元気がありません。それに比
べると、たまり水の方のは、からだの長さも五ミリぐらいで、
水道の方のより三ミリも大きく、そのあくる日には、第二回目
のだっ皮をしているものもありました。先生のお話では、かは、
ぼうふらから第二ぼうふらというさなぎになるまでに、ふつう、

三回もだっ皮をくり返すのだそうです。

水道の水を入れた方が育ちが悪く、元気がなかったのは、
水道の水がきれいなので、ぼうふらの食べ物がなからだろ
うと思えます。

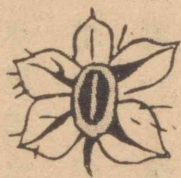
たまり水の方の九ひきは、それから二
日目に、第三回目のだっ皮をしておにぼ
うふらになりました。おにぼうふらは頭
がたいへん大きく、せなかから、息をす
る管が二本、耳のように出ています。ふ
つう、こん虫のさなぎは運動しませんが、
おにぼうふらはよく運動します。ぼうふ
らはからだ全体をくねくねと曲げて運動



し、しずむ時は、からだをまっすぐにのばして、まっさかさまに、すうつとしずんでいきますが、おにぼうふらは、しっぽの先にあるえびのしっぽのようなもので水をけって、上下しています。

また息をする時、ぼうふらは、しっぽの管一本を水面に出して息をしますが、おにぼうふらは、せなかにある二本の管を水面に出して息をします。そしておにぼうふらは、ぼうふらよりもずっと長い時間、水面に止まっています。

ぼうふらのしっぽの管の先を、虫めがねで見ましたら、管の口の周囲に、花びらのようなものが五つあるのがわかりました。一つだけ小さく、他の四つは同じぐらいの大きさで、



ちようど、花がさいたように見えます。ぼうふらは、この花のようなもので水面にぶら下がっているのです。

それから二日たつと、たまり水の方のは、六びきだけはねがはえて成虫になり、残りは全部さなぎになりました。

はねがはえて成虫になる時には、さなぎのせなかが丁の字形に破れて、白い成虫が出て来ます。からだの大部分が水の上に出ますと、からだを一つゆすって横にたおします。水の上に足をついて、からだをささえています。しばらくの間は、そうしてさなぎのからだのところについていますが、二三分してはねがかわくと、飛び出します。

あくる日には、全部成虫になりました。新しい成虫をよく見ると、口のところの管が、わりあいに短いものと、たいへん長

いものどあります。そして、この管が短い方のものは、頭に、ふさのはえた角のようなものがあり、管の長い方は、そのふさがあまり発達していません。これは、おすとめすとのちがいなのだそうです。めすは血をすいますから、おすよりも管が長くて、血をすうのに便利なようにできているので

かの発生

- | | |
|------|---|
| 一日目 | コップでかをつかまえた。 |
| 七日目 | 水面にたまごがたくさんういていて、たまごがかえって、ぼうぶらがたくさん発生した。水道の水とたまり水とに分けて研究を始めた。 |
| 九日目 | 水道の水のぼうぶらは五ひき残して、あとはみんな死んでしまった。 |
| 十日目 | たまり水の方では、二回目のだっ皮をしたものもあつた。 |
| 十一日目 | たまり水のものうち、九ひきがおにぼうぶらになつた。 |
| 十二日目 | たまり水のは六ひき成虫になり、残り全部がさなぎになつた。 |
| 十三日目 | 全部成虫になつた。水道の水のものは一ひき残して全部死んだ。 |

す。数えてみたら、二十ひきのうち、おすが十二ひき、めすが八ひきでした。たまり水の方のぼうぶら全部が完全に成虫になつたのに、水道の水の方は、わずか一ひきだけが残つて、あとは全部死んでしまいました。残つた一ひきも、その時まだやつと三ミリぐらいにしかなくていませんでした。

これでぼうぶらの研究発表は終りです。この観察によつて、ぼうぶらは、きれいな水よりきたない水の中でよく育つということを、ぼくははつきりと知りました。かは、いろいろの悪い病気を伝せんするおそろしい虫です。水たまりをなくしたり、下水をいつもきれいにしたりして、かの発生を防ぎましょう。そして、悪い病気のひろがることのないようにしたいと思います。

(二) 三つの家

出る人

幸福

天の使

男

ばあさん

おくさん

犬、うさぎ、にわとり

ぶ台



美しい花園。後には緑のおかがあって、いろいろな花が
さきみだれている。ほがらかな小鳥の声でまくがあくと、
幸福が下手から、天の使が上手から出て来る。どちらも
りっぱな着物を着ている。

天の使「幸福さん、あなたははいよいよ旅へ行くのですか。」

幸福「はい、世の中の家をたずねて行って、幸福をあたえて
来ようと思います。」

天の使「それはよいことです。世の中には、幸福のほしくない
人はありませんから、あなたが行くと、どこでもきつ
と飲がいされるでしょう。」

幸福「それについて、何か注意しなければならぬことがあ
るでしょうか。」

天の使「あります。あなたは、そんな美しい着物を着て行ってはなりません。」

幸 福「なぜ、美しい着物を着て行ってはいけないのですか。」

天の使「一目で、あなたが幸福だとわかります。すると、本当にあなただをよび入れる資格のない人でも、あなたをよびこもうとしましょう。しかし、そんな家へはいつてはいけません。」

幸 福「どんなふうをして行ったらよいでしょうか。」

天の使「その美しい着物の上に、きたない着物を着て、びんぼうのようなふうをして行くのです。」

幸 福「そんなふうをして行ったら、どの家でも歓迎いしてくれますまい。」

天の使「歓迎いしてくれなかったら、その家へはいらないことにすればよいのです。」

幸 福「よくわかりました。それでは、私はびんぼうなふうをして行きます。」(と、森の中へ行って、一まいのぼろの着物を美しい着物の上に着る。)

天の使「まあ、きたないなりですね。」

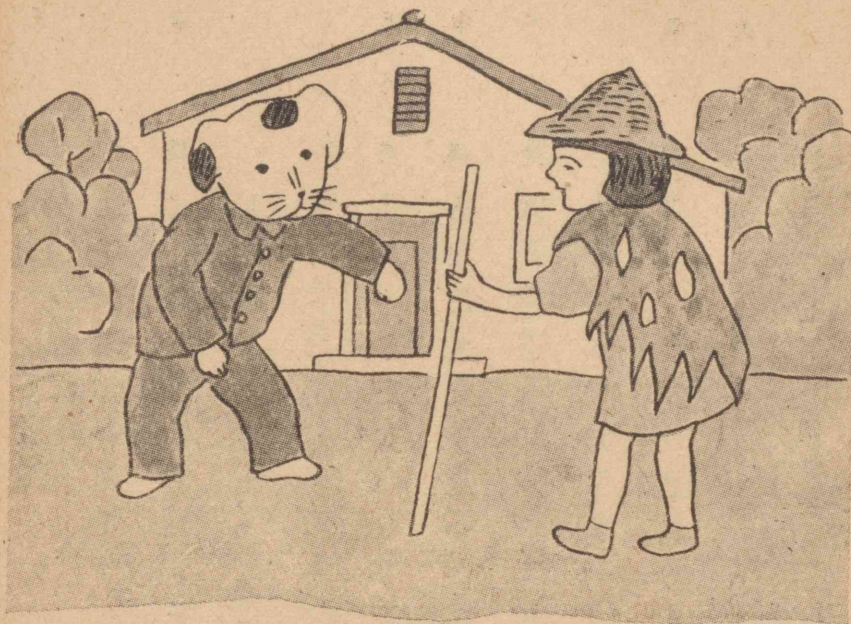
幸 福「あなたもそう思いますか。それでは行って来ます。」

天の使「気をつけていらつしやい。そして、本当の幸福をあたえていらつしやい。」

幸 福「そうします。さようなら。」

天の使「さようなら。」

上下へ別れ去る。



二

遠くて犬のほえる声が聞える。それと共にぶ合が明るくなる。正面にりっぱな家がある。
幸福がきたない着物を着て、竹のつえをついて、病気のこじきのようなふうをして来る。と、家の中から犬がほえて出る。

犬 「わん、わん、わん。こら、

おまえはどこへ行く。」

幸 福「この家へはいろいろと思うのです。」

犬 「ばかな。そんなきたないなりをして、この家へはいれるものか。いったいおまえの名はなんというのだ。」

幸 福「びんぼうといひます。」

犬 「それみる。そんなやつにはいられてたまるものか。(きけぶ) だれか来てください。変なやつが来ました。わん、わん、わん。(と、ほえる。)

家の中から、ふとった男が出て来る。

男 「どうしたんだ。やかましいじゃないか。」

犬 「きたない男が来たのです。」

男 「そうかい。(幸福に) おまえさんはだれだ。」

幸 福「びんぼうです。あなたの家へ行こうと思うのです。」
 男 「どんでもない。」
 幸 福「入れてくれませんか。」
 男 「お断りだ。帰っておくれ。」（と、戸をしめて、犬を連れて行ってしまふ。）

ウウ……と、いつまでも犬のうなる声が聞える。

天の使（上手から出て来る）「この家の人、あなたを追い立てましたね。」

幸 福犬までおそろしい声でうなっていました。

天の使「旅はもうやめですか。」

幸 福「いいえ、次の家へ行ってみます。」

と、下手へ行く。天の使は上手へ行く。

三

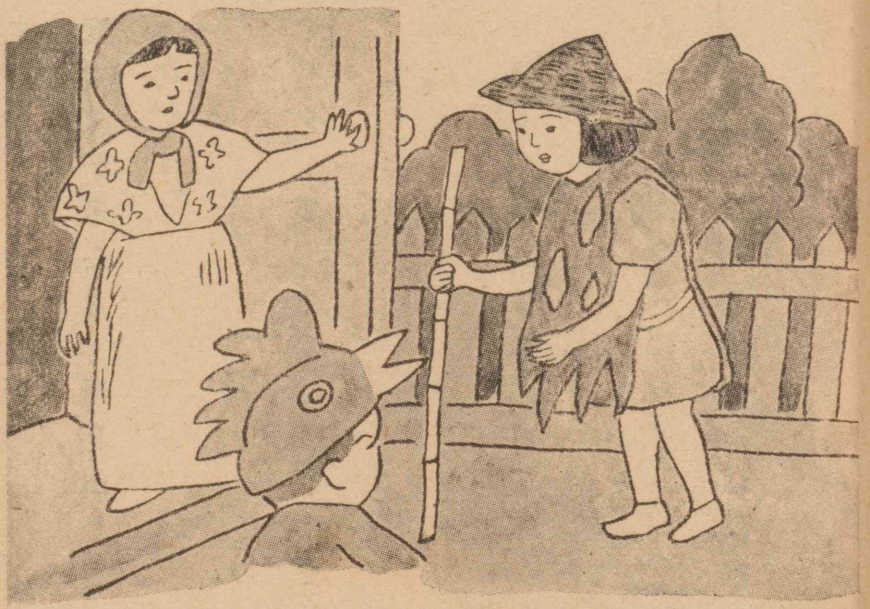
あるおばあさんの家。に
 わどりをたくさんかかって
 いると見えて、鳴き声が
 にぎやかに聞える。幸福
 が前のように、とぼとぼ
 と出て来る。

にわとり（おくから出て来てよぶ）

「こけっここここここ。」

あれ、変な人が来たよ。

幸 福「変な者ではありません。」



あなたはこの家の番人ですか。

にわとり「番人ではありませんが、変な人が来たら、声を出して人をよぶことになっているのです。」

幸 福「私に変に見えますか。」

にわとり「だって、そんなきたないなりをして。あなたはなんと
いう名ですか。」

幸 福「私はびんぼうといます。」

にわとり「それみなさい。そんな者に来られてたまるものですか。
こけっここここここ。」

おばあさん「おくから出て来る。」「だれか来たんだな。にわとりがや
かましく鳴いている。(幸福を見て) おまえさんはだれ
です。」

幸 福「びんぼうです。」

おばあさん「びんぼうだって。そんな者は私の家では大きらいだ。
早く帰っておくれ。(と、戸をしめて行ってしまふ。)

にわとり「本当だ。ぐずぐずしていると、私も取って食われるか
もしれない。」

と、上手へ行く。入れちがって天の使が出る。

天の使「また断られたようですね。」

幸 福「仕方がありません。もう一けん行ってみましょう。あ
あ、この次の家は前の二けんよりずっとびんぼうなよ
うです。」

天の使「さようなら。また会いましょう。」

と、天の使去る。



四

ぶ台が明かるくになると、よくそうじされた貧しい家がある。前にうさぎ小屋。うさぎがねている。幸福が出て来る

福「ここには犬もいないし、やかましいにわとりもかかっていないようだ。おや、うさぎさんがねているな。

幸

(よび起す) うさぎさん、うさぎさん。

うさぎ (目をさます) 「あなたですか。ぼくを起したのは。」

幸 福「すみませんね。でも、だまっではいってはい悪いだらうと思っつね。」

うさぎ「かまいませんよ。おかみさんは親切な人ですから、だれが来ても喜ばれます。」

幸 福「ありがとう。(よぶ) おくさん、おくさん。」

ど、おくからやさしそうなおくさんが出て来る。

おくさん「はい。何かご用ですか。」

幸 福「私はびんぼうです。」

おくさん「まあ、かわいそうに。(ど、そのままおくへひっこんで、おにぎりをも一つ持って来る。) あなた、おなかがすいている



ある小さい町のゆう便局で、配達夫のウォーカさんがはこの中からゆう便物を出して、より分けています。おやっ、なんだ、この手紙は。切手もなければあて名もない。差出人の名も書いてない。これでは、配達することも送り返すこともできないじゃないか。

「ははあ、まただれかあわて者が、うつかりしてポストへほうりこんでし

でしよう。これをおあがりなさい。」

幸 福「これをいただいてもよろしいのですか。」

おくさん「だって、おなかがすいている人を見てはいられません。(なおよく見て) それに、あなたはそんな着物を着ていて寒いでしょう。待っていていらっしゃい。よいものではないけれど、私のお古をあげましょう。」

と、おくへはいる。上手から天の使が出て来る。

天の使「おめでどう。とうとうはいる家が見つかりましたね。」

幸 福「そうです。もうこんな着物はぬいてもよいでしょう。(着物をぬぎすてて) ここが、私の本当にはいる家でした。(と、静かにはいって行く)。」

天の使にこにこして見送る。心のうき立つような音楽。

まったのだな。

と、局長さんが言いました。

この時、まど口でゆう便を出していた男が、

「まあ、なんてばかな人でしょ、うね、ふうとうに何も書かないで手紙を出すなんて——」。

と口を出しました。

「ところが、そういう人が案外多いのです。私の方では、こうした手紙が、一年に山ほどたまるのですよ。」

「中をあけて、差出人をごらんになったらどうですか。」

「そんなことはできません。ゆう便の規則を破ることになりま

すからね。」

それでもウォーカさんは、なんとかしてこの手紙を届けてやる方法はないものかと考えているうちに、うとうととねむってしまいました。

そのうちに夜になって、ゆう便局の人たちはみんな帰ってしまいました。ウォーカさんは、昼間のつかれでぐうねむっていました。ふと目をさますと、おどろきました。どこから現われたのか、七八人の小人が、わあわあさわわいでトランプをやっています。「おい、私もなかまに入れてくれないか。」



「やあ、ウォーカさんですか。どうぞ、どうぞ。」

小人はトランプをきつて、みんなに配りました。見るとそれは、あす配達するはずの手紙なのです。

「おやおや、これでどうして勝負を決めるのだね。」

「はい、一番弱いのが、いい加減な口先だけのうそを書いてある手紙です。それより強いのが、義理一べんの仕方なしに書いた手紙。その次が、ていねいで礼儀正しいというだけの手紙です。」

「次に強いのが、人を喜ばせたい心から書いた手紙。一番強いのが、愛情と真心をこめて書いた手紙です。」

「ふうん。しかしどうして手紙のなかみがわかるのだ。」

「それは、私どもは、上からさわっただけでわかるのです。中

の文句だって、ちよつと額に当てれば一字一字みな読めます。」

そこで順々に一まいずつ手紙を出しました。ウォーカさんは、きょうのあて名のない手紙をそつと出しました。

「やあ、ウォーカさんの勝ちです。」

「この手紙が、そんなに強いのかね。」

「強いですとも。これは、子供が母親にあてて書いた手紙です。中を読んでみましょう。」

「——おかあさん、おたっしやですか。ぼくは自動車の運転手になっていました。ぼくはおかあさんのことをわすれたことはありません。でもおかあさんは、ぼくがだまって家を出てしまったので、おこつていらつしやるでしょう。どうかお許しください。返事をくださったら、すぐおわびをしに帰ります。」

ポップより。なつかしいおかあさんへ。

「これはたいへんな手紙だ。たとい一年かかっても、国じゅうを歩き回っても、ぜひともこのおかあさんをさがし出して、

届けてあげなければならぬ。

ウォーカさんはあくる朝になると、いつものかばんにその手紙と大きなパンを一きれ入れて、ゆう便局を飛び出しました。「さて、どこへ行ったらよいものかなあ。」

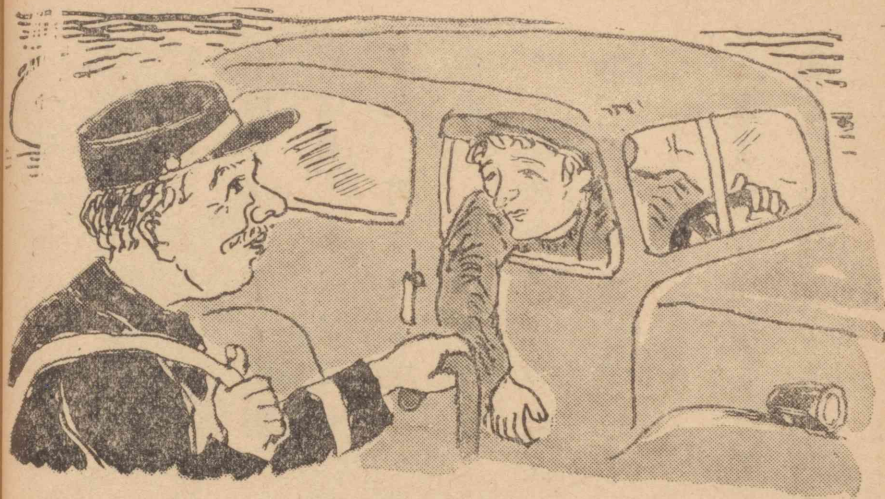


一日たち、二日たち、ウォーカさんが歩き始めてから、いつの間にか一年と一日という月日がたちました。どこへ行っても子供がだまって家出したという家は見つかりません。村も見ませんでした。町も見ました。美しい日の出や、日の入りも見ました。さすがのウォーカさんも、つかれてしまいました。

ある日、道ばたで休んでいまして、向こうから自動車がやって来まして、

それがなんと、一





時間ハキロそこそこの、おそろしくの
ろい速力です。

「もしもし、その車は何か故しようで
も起したのかね。」

すると、運転手が答えました。

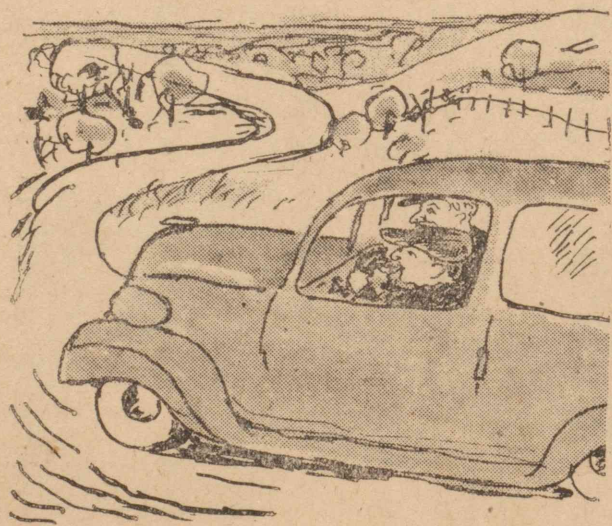
「いいえ、実は、私に非常に悲しいこ
とがありますので、それでこの車も、
こんなに悲しい走り方をしてい
るの
です。」

「へええ。君は何がそんなに悲しいの
だね。」

そのことですがね。そう、今からち

ようど一年と一日前の話になりますが、私はおかあさんに、
おわびの手紙を書いたのです。ところがおかあさんから、今
になってもなんの返事も届きません。おかあさんは、私を許
してくださらないのだと思
うと――」。

えっ。じゃあ、君の出したの
はこの手紙だね。私はこの手
紙のおかげで、もう一年と一
日、この国じゆうを歩き回っ
て来たのだよ。なあに、今さ
らあて名を書かなくてもよい。
私をその車に乗せて、君のお



かあさんの家へ連れて行きたまえ。すぐに配達してあげるから。

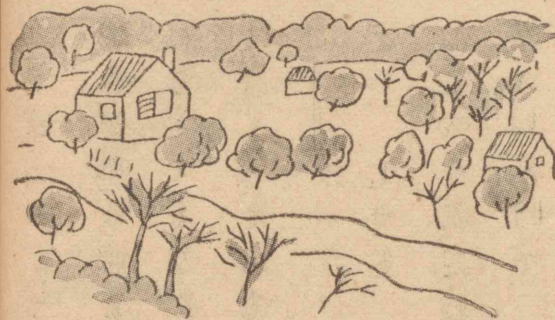
運転手が一つ足をふんばると、自動車はうれしそうに、全速力で走り出しました。四十キロ、五十キロ、六十キロ――、七

十キロ、八十キロ、九十キロ――。

「ほら、あの家です。向こうに、まどがある家、あれがそうなんです。」

ウォーカさんは、口ぶえをふきながらその家へかけて行きました。

まどの中では、年をとったおかあさんがほろほろなみだをこぼしながら、何か仕事を



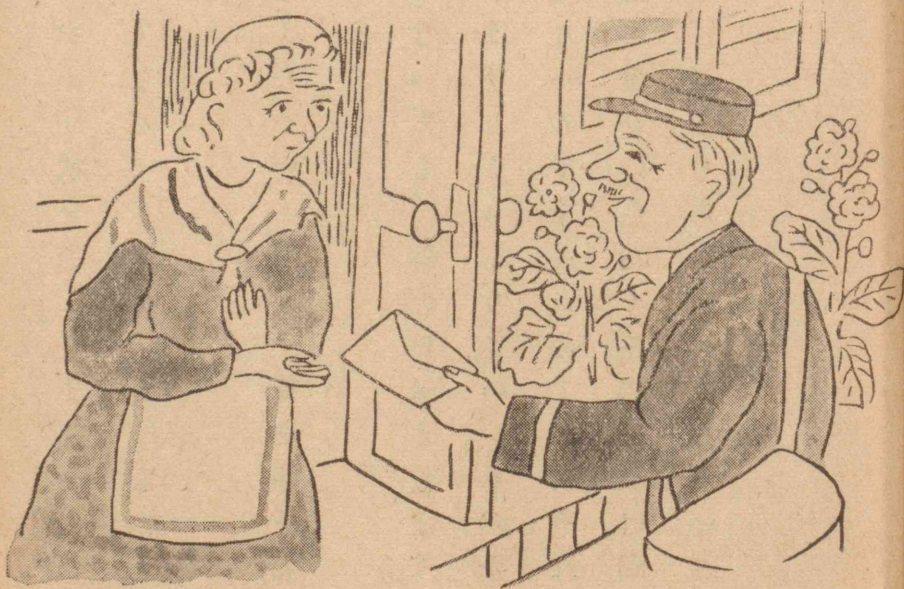
をしていました。

「今日は、ゆう便ですよ。」

「おや、ゆう便屋さん。これは私に來た手紙ではないようですよ。あて名が書いてありません。」

「いいえ、まちがいはありません。まあ、中を読んでみてください。」

読むうちに、おかあさんの顔には、さっと明かるい光がさしました。



「まあ、まあ、ポップがこんなあやまり状をよこしましたよ。
あやまらなくても、私はおこつてなどいけません。私はその子
が帰ってさえくれれば——。
ゆう便屋さん、ちよつとお待ちください。私、一筆返事を書
きますから。」

「いいえ、返事などお書きにならないでも、私がお伝えします。
それよりも、ばっ金をいただきます。ごらんささい、その手
紙には、規定の料金がはらつてないのですからね。やれやれ、
一年と一日というもの、このばっ金をいただくためにかけ回
つていたようなものです。いや、どうもありがとうございますま
した——。」

四 雪国

(一) 冬がれ

見わたすかぎり落葉した林。
かし、なら、けやき、くぬぎなど、
みんな、はだかだ。
それなのにちつとも寒そうではない、
元気よくうでをのばしている。

ひゅうひゅうふく北風。



地に散らばった木のえだ。
ぼくたちはかごをせおって
なかよくかれえだを拾って歩く。
かごが一ぱいになるまでがんばろうね。

しもどけの道に見つけた
小さな動物の足あと。
おや、きつねの足あとかしら、
うさぎの足あとかしら。



(二) 冬じたく

きょうは日曜日で、役場へ行っているおとうさんも、五年生の孝次も三年生の洋子ちゃんも休みです。孝次は朝ゆつくりねむりました。

孝次が目をさますと、妹の洋子ちゃんが、
「おにいちゃん、たいへんだわ。お庭がまっ白になっているよ。
見てごらん、見てごらん。」

と言います。

「雪がふったのかい。」

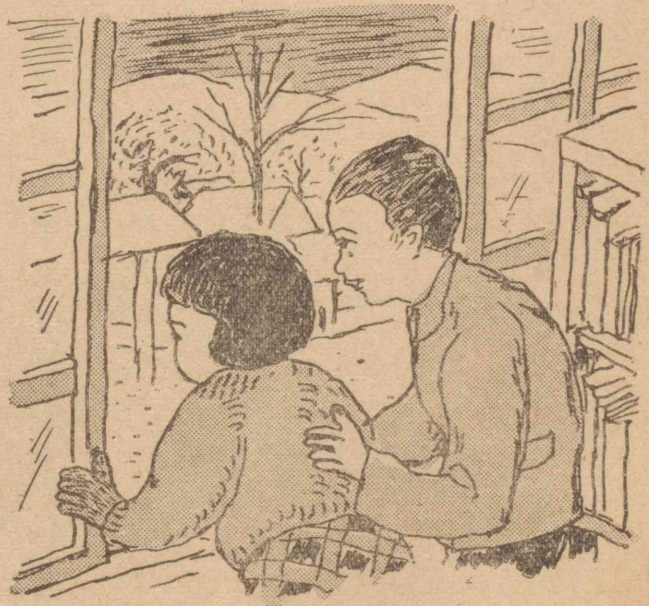
「ううん、しもがふったって、おかあさんが言っていたわ。」
「そう。」

見ると洋子ちゃんは、赤い毛糸のチヨツキを着て、まるくふくれたように見えます。孝次も起きて服を着ましたが、寒いのにびっくりしました。

「おっ、けさは寒いんだなあ。ふうん。」

と言いながらまどの外を見ると、庭には、一面に白い粉をかぶせたようにしもがふつています。草の葉も白いし、いど小屋の屋根も白いし、向こうの畑のだいこんの葉も白くなっています。

「冬だ、冬だ、冬が来たんだよ。わあ、寒い。」



孝次は手をポケットに入れました。その時、

「あら、孝次、起きたの。」

と言いながら、おかあさんがはいつて来て、青いジャケットを孝次にわたしました。

「さあ、きょうは冬じたくで、とてもいそがしいから、孝次はおとうさんの手つたいをして、ストーブをすえ付けたり、雪がこいを作ったりするのですよ。これを着なさい、きょうは寒いから。」

そう言つて、おかあさんはまたいそがしそうに台所へ行つてしまいました。孝次が上着をぬいでそのジャケットを着てみると、去年の冬着た時よりも、ずっと小さくなっています。おなかのあたりも、引っ張らないと、すそがズボンに届かないし、そで

も短くて、うでが出てしまっています。むねのあたりも苦しいような気がします。

「あら、おにいちゃん、そのジャケットは小さくて着られないわ。変なかつこうだわ。あら、あら。」

と、見ている洋子ちゃんがわらい出しました。

「そうだなあ、これは小さくなったのかなあ。」

孝次はうでを上げてみたり、横の方に首をかしげたりして言いました。

ふたりは台所にいるおかあさんの所へ、わらいながら出かけました。洋子ちゃんが、

「ねえ、おかあさん、見てごらんささい。ほら、おにいちゃん
のジャケット。」

と言いますと、

「あら、あら、すっかり小さくなつて。それでは、とても孝次には着られないわ。」

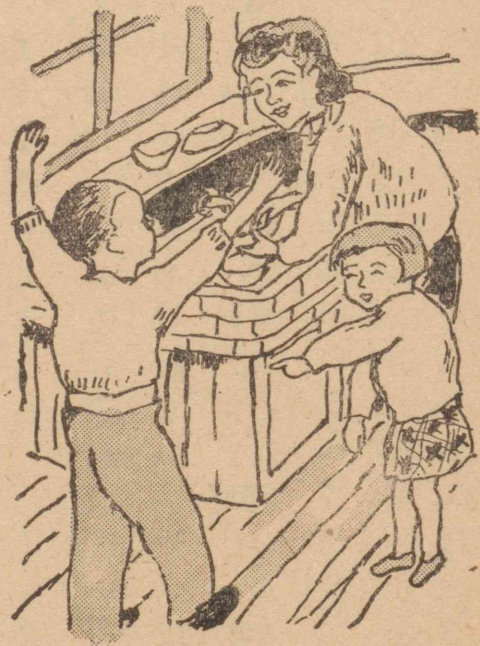
と、おかあさんが言いました。

「毛糸つてこんなにちぢんでしまうものなの。」

と、孝次がそれをぬぎながら言うと、おかあさんは、わらいながら言いました。

「まあ、孝次にはおどろいた。あなたが、それだけ大きくなつたのよ。」

「なあんだ。じゃあ、これがちぢんでしまったわけではないの。」



「そうですね。」

「ぼくはまた、本当に着物が小さくなったのかと思っていった。ぼくだって、自分の大きくなるのはわかってはいるけれど、でも、いつも着物の方が小さくなったって、おかあさんが言うものだから。ふうん。」

と、孝次はまだよくわからないような顔をしました。いくら自分が大きくなったって、去年の冬には、あんなに楽に着ていられたジャケツが、こんなに急に小さくなるわけがない。やっばり、毛糸なんてちぢむものではないかなというような顔で、孝次はぬいだジャケツをにらんでいました。

「おかあさんはまたおかあさんで、考えこんでいます。」

「いくら孝次のせいがのびたって、おとうさんのお古では大き

すぎるし、ええと、ねえ孝次や、ここへ来てごらんさい。」

孝次がおかあさんのそばへ行くと、おかあさんは孝次とならんで、せいを比べてみました。五年生の孝次は、この夏の間にとても大きくなったので、おかあさんの口のあたりに頭があります。

「まあ、こんなに大きくなったのね。それでは、おかあさんのジャケツを着てみるといいわ。」

そう言つて、おかあさんは、たんすからはい色のジャケツを出して来ました。それはすそとそでの所に、赤と黄のしまがはいっています。

「赤いも様があるのなんかいやだなあ。」

と、孝次が言いました。

「いいから、まあ、着てごらんなさい。」

ジャケットを頭からかぶって着てみると、そでとすそが少し長すぎました。おかあさんは、赤と黄のしまのある所を内側に入れて、くるりと二つに折り返しました。しまは見えなくなりました。

「ほら、ちょうどいいでしょう。」

ほんとに、おかあさんのジャケットが、孝次にちょうどよいのでした。

「それでは、さあ、みんなでご飯ですよ。」

物置でストーブのしたくをしていたおとうさんも出て来て、朝ご飯になりました。ジャケットの話をおかあさんがすると、おとうさんもおどろいて、

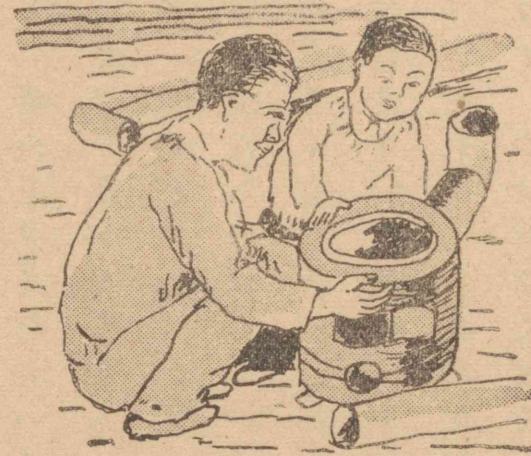
「ぞうか、大きくなったものだなあ。」

と、孝次を見てわらいました。

「さあ、冬が来るから、冬ごもりのしたくだぞ。」と、食事がすむとおとうさんが言いました。

孝次たちの住んでいる北海道では、秋の終りが近づくと、雪の中であらす冬のしたくをします。家の中にはストーブをすえ付けます。北風のふき付ける方角に、雪よけのかき根を作りまします。それから、冬の間食べるだいにこんや、にんじんや、ごぼうや、キャベツなどを、ゆか下のあな倉にしまいこみます。そうしないと、畑は雪にうずもれてしまうし、野菜はこおってくさってしまうからです。またつけものも、来年の春まで食べるだけ、たるにいくつもつけて、物置にしまっておきます。

孝次とおとうさんは、ストーブのとり付けを始めました。まず茶の間のろの上に、たたみの三分の一ほどの大きさのストーブ台を置きます。孝次の家のストーブ台は、木のわくにセメントを流して作った物でした。よその家



には、板にブリキをかぶせて作ったものもあります。その上に鉄板で作った円とう形のストーブをすえました。

「さあ、こんどはえんとつを持っておいで。」

と、おとうさんが言いました。孝次は物置から、太さ十センチ、長さ一メートルほどあるえんとつを、五六本持っ

て来ました。おとうさんはそれをつぎたし、曲がりの所をとり付けて、まどの上にあるえんとつのあなから、外へ出してやります。それがすむと、孝次とおとうさんは、外に出て、まどの前にぼうを立て、たおれないように、えんとつを屋根の上までささえてやりました。

「よし、よし、これでできた。」

さあ、こんどは雪がこいをし

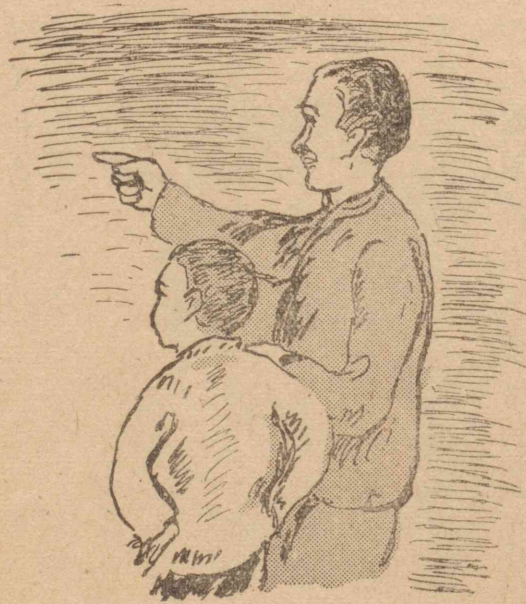
よう。もうすぐ冬だ。ほら、

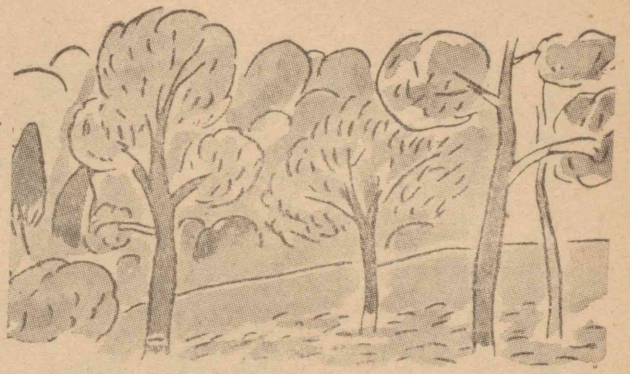
あの森を見てごらん。」

おとうさんはそう言って、家

の前の森を指さしました。ひと

ばんのうち、森の木の葉は、





すっかり赤くなっています。

「きれいだね。」

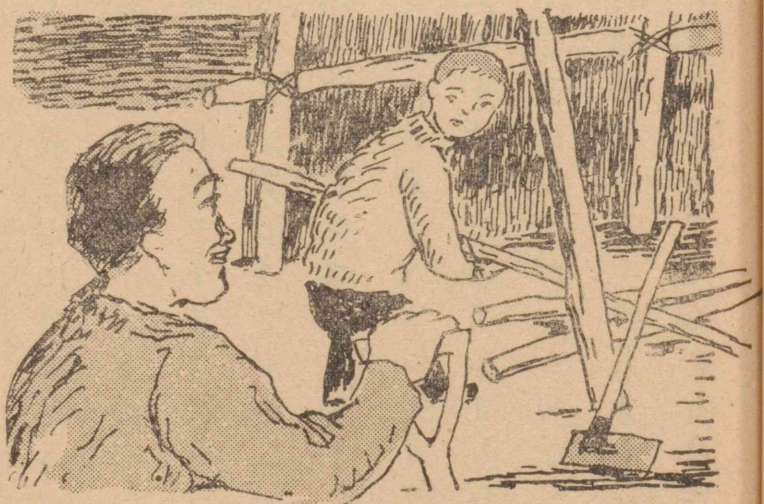
と、孝次が言いました。

寒い国では、ひとばんしもがふると、森の木がすっかり美しい赤い葉に変わることがあります。それは、もう秋が終り、冬が来るといふ前ぶれなのです。冬になると、北風がふきつけて、げんかんの前に大きな雪のふきだまりができるので、毎年そこへかき根を作っておくのです。

「孝次、おまえはここへあなをほりなさい。」

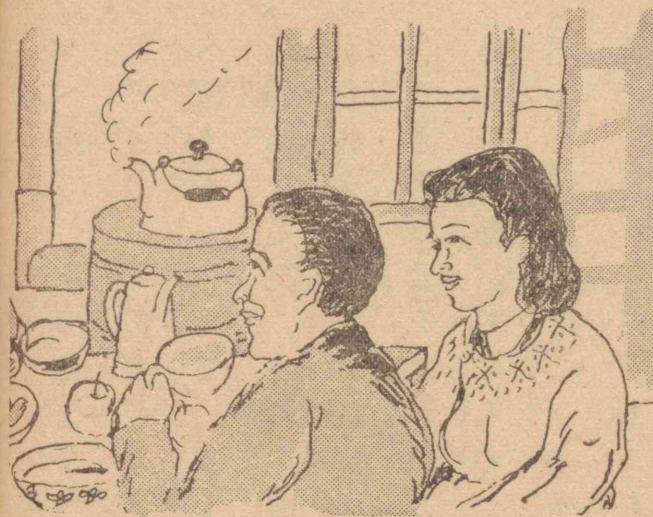
と、おとうさんが言いました。孝次はくわを持って来て、おとうさんが印をつけた所へあなを二つほりました。おとうさんは、

シヤベルで、そのとなりへあなを三つほりました。あなができると、そこへぼうぐいを立て、土でうずめてふみ固めました。それから横にまたぼうぐいをわたし、たおれないように、ささえぼうを二か所しました。そうして働いていると、寒い朝だと思っていたのに、いつの間にか、ぼかぼかとかからだがあたたまってきました。

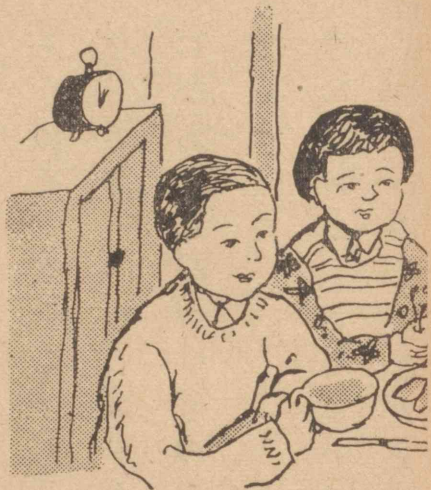


そのころ洋子ちゃんは、おかあさんのお手つだいをして、キヤベツやだいいこんをせつせとゆか下のあな倉に運んでいました。

おかあさんは手ぬぐいを頭にかぶり、あな倉へはいつて、野菜を順序よく、きれいにならべています。



家じゅうの人がそろって働いたので、お昼ごろには、だいぶ仕事がかどりました。お昼ご飯の時には、すえ付けたストーブに火をたいてみました。おとうさんが、切っておいた木の根や古材木をくべました。火はどんどん燃えて、ストーブの横はらの所が赤くなってきました。まず、ストーブにじやがいのものなべをかけて、食事のしたくをしました。それから、朝、おかあさんがしぼつ



次も洋子ちゃんも、それが大スキでした。北海道はじやがいのものがたくさん取れるので、どこの家でもじやがいのを食べるので、孝次はいっしょうけんめいに働いたので、いつもよりたくさん食べました。

「孝次も大きくなっただけあって、去年よりよほど役に立つようになつたなあ。さあ、昼からは、あの雪がこいに板を打ち

付けるんだ。

と、おとうさんが言いました。

「はい。」

と、孝次は元気のよい返事をしました。

「おかあさん、わたしの方は。」

と、洋子ちゃんがたずねました。おかあさんはわらって、

「そうねえ、洋子ちゃんはまだ小さいから、もうあんまり働か

なくてもいいわ。ストーブにばんのご飯を乗せて置くから、

おかあさんがつけものをする間、よく火を見ていてね。」

と言いました。

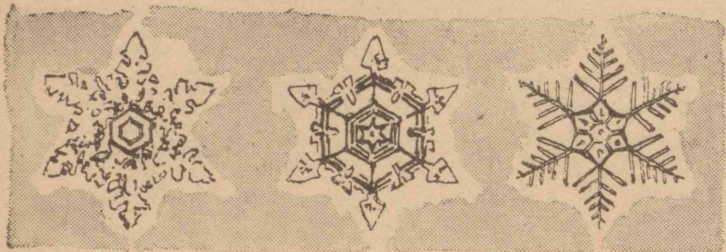
孝次はおとうさんといっしょに、食事がすむと、物置へ板を

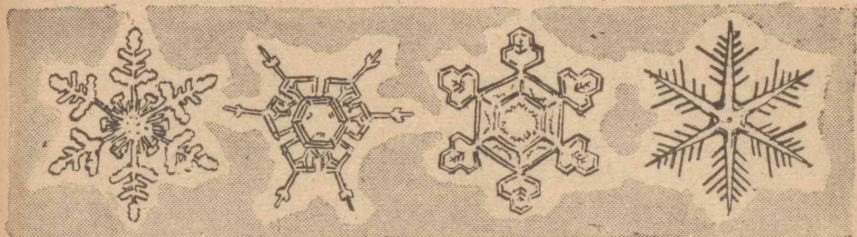
出しにはいつて行きました。

(三) 雪

雪の結しようは、むかしから六つの花などといわれ、美しくて、私たちにもなじみの深いものです。雪の日に、外とうにちよつと止まった一つの結しようを見ても、思わず自然の美しさに打たれるほどです。

雪の結しようは、雨つぶがおったものでもなければ、雲の水できがおったものでもありません。水じよう気から直接に、氷の結しようとしてぎよう結したものです。氷点下二十度ぐらいの所では、水じよう気はすべて氷の結しようになります。





すが、氷点下十度から、氷点下五度までぐらいの寒さでは、必ずしも水じょう気は雪にならないのです。

雪の結しじょうは、よく調べると、いろいろな形をしています。アメリカのベントレーという人は、千九百三十一年に、雪の結しじょうの写真を三千まい集めて出版し、世界的に有名になりました。日本では、土井利位という人が、たくさんの雪の結しじょうを観察して、今から百二十年ほど前に、「雪華図説」というりっぱな本を出しました。最近では、北海道大学の教授の中谷宇吉郎博士が、雪の結しじょうについて、たいへんりっぱな研究をなさいま

した。中谷博士は、人工的に雪の結しじょうを作ることにも成功して、雪の結しじょうのいろいろな形は、どんな氣象状態の時にできるかということをつき止めたのです。

粉雪 ぼたん雪

温度が低い時にふってくる雪は、さらさらしていて、細かく、着物についても、はたけばすぐに落ちてしまいます。ですから、寒い国では、雪がふってもかさばさしません。角まきという毛布のようなもので、頭からからだ全体を包んで外出しますが、角まきは少しもぬれないのです。

このようにさらさらした粉雪は、地面に積もっても、風がふくとはいのように飛びます。これを吹雪といっています。吹雪が起

ると、風の強い所の粉雪は飛んで、風の弱い所にうず高くたまります。これをふきだまりといいます。鉄道線路の上にふきだまりができることありますので、雪国の冬は、線路のわきに防雪さくというものを作ったり、防雪林を作ったりして、これを防ぎます。

温度が低い度より上になると、雪の表面は、一部がとけて水になっているので、雪の結しようはおたがいくっついて、大きな雪ぺんになります。このような雪ぺんになってふる雪をぼたん雪といいます。ぼたん雪は綿のようで、一つの雪ぺんが二センチにも三センチにもなります。はなはだしい時には、かしわもちを包む、あのかしわの葉と同じぐらいの雪ぺんがふることもあります。昭和九年十二月、東京にふった雪ぺんは、六・二

センチ、昭和二年三月、高知にふった雪ぺんは十二センチありました。

ぼたん雪は、積もってもべたべたしています。ですから、雪だるまを作ることができません。粉雪は手でおしても固まりません。雪だるまはもちろん、雪合戦の玉もできません。

積雪

地面に積もった雪のことを積雪といいます。粉雪が積もると、初めはさらさらしていますが、日が当たると、とけてべとべとになります。そしてまたこおると、かたい氷のようになります。粉雪が積もった所に、強い風が吹き続けると、かたい雪になり、やがてざらめのような雪になります。このように、地面に積も

った雪は、いろいろに変化しますので、積雪を分類する必要が
あります。日本ではその分類の仕方は、まだ一定していません
が、次にその一例を示して置きましょう。

かわき雪——さらさらしたはいのような雪

ぬれ雪——べとべとしたぬれた雪

しまり雪——かたくしまった雪

ざらめ雪——ざらめのようなつぶの雪

こおり雪——つるつるにこおった雪

日本で積雪の一番多い地方は、山形県、新潟県、富山県、石
川県、福井県の山間地方です。この雪は日本海をふきわたって
来た風が、山がく部で上しう気流になるためにふるのですが、
積雪の一番多い所が、北でもなく西でもなく、日本海が一番は

ばの広い所をわたって来た風のふきつける山がく部だといふこ
とは、興味深いことです。

なかにも新潟県高田付近は、日本で第一の大雪の地方といわ
れ、昭和二年二月十一日には、積雪の深さは三百六十五センチ
にもなり、信越線は前後一週間にわたって不通になりました。

このような大雪がふる所で
は、屋根に積もった雪を、
ひと冬の間は何回もおろさ
なければなりません。これ
を雪おろしといいます。そ
の雪は道路にうず高く積ま
れて、しまいには道路の方



が、家ののきより高くなり、二階のまどから出はいりするようになり、高田市に行きますと、どの家も、人道の上に二階をつき出してあります。これをがんぎといいますが、冬はがんぎの下が、人々の通路になるのです。このように雪国の人は、冬の間は、よけいな手間と金を使い、日の目を見ない暗い時を過さなければなりません。農業も冬の間は全く休みですから、表日本の農家に比べると、収入がずっと少なくなります。鉄道でも、冬の間を使う除雪費は、非常に大きな額になります。

なだれ

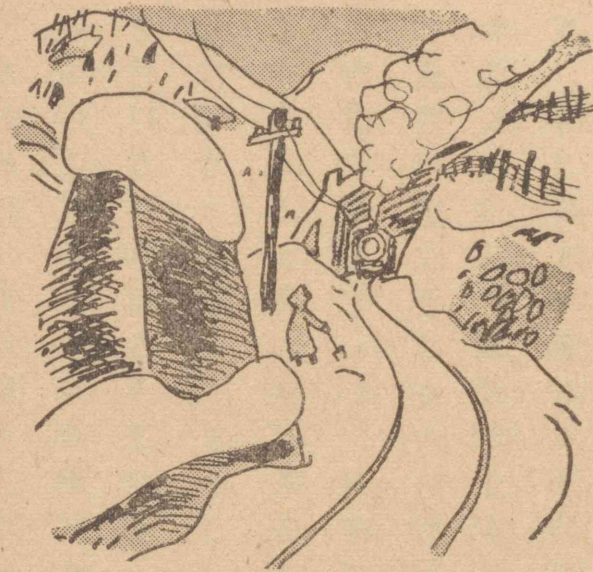
山のしゃ面などに雪がたくさん積もり、一時にどっと流れるように落ちてくるのを、なだれといいます。なだれは家をつぶ

し、木をぬき、鉄道線路をさらい、人をうずめてしまっておそろしいものです。冬から春先にかけては、山では、なだれによく気を付けなければなりません。

先に積もった雪が、かたくしまった時、その上に粉雪がたくさん積もると、ちよつとした力ですぐになだれになります。これを粉雪なだれといい、地方では「あわ」などといいます。冬の中の大雪の時によく起ります。

春先になって、温度が上がってくると、積雪と地面の間がとけて、今までしゃ面にこおりついてた雪が、急にすべり出すことがあります。これを底なだれといい、地方では「なで」などといいます。このなだれは雪が岩のようにかたくなっていることと、山はだの木も、土も、岩までもさらって落ちてくるので、

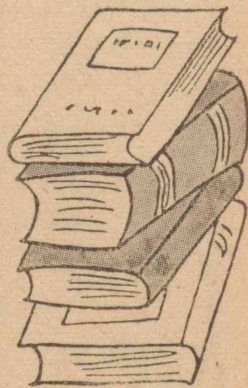
たいへんおそろしいものです。二三十年前のことですが、北陸線の親不知のトンネルの口で、走っている列車の上に底なだれが落ちかかって、客車も乗客も、くしゃくしゃにつぶされたことがありました。



このように、なだれのために受ける害は大きいので、鉄道では、なだれよけのさくや防へきを作り、万一なだれがあれば、となりの駅にけい報が鳴るしかけを作ったり、いろいろなくふうをして、なだれを防ぐのに努力しています。

五 本ができるまで

(一)



日曜日の朝、日当たりのよいえん先で、童話集を読んでいた。そのうちに私はふっと、私たちがこうして読んでいる本は、どんなふうにして作られるのだらうと思った。表紙にはきれいな絵がかいてある。さし絵もたくさんはいつている。

「そうだ。青木のおじさんに聞いてみよう。」

そう思って、私はとなりのおじさんをたずねることにした。

おじさんは作家だ。私たち子供のための童話をお書きになる。私がつねて行くと、おじさんは、朝の食事をすませて新聞を

読んでいらっしやった。

「おはようございます。おじさん、きょうは本がでるまでのお話をしてください。」

「どうしたの、急にそんなことを言い出して、雪子さん。」

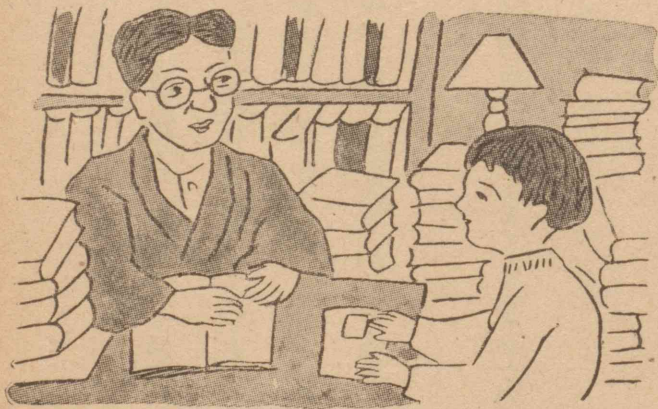
「さっき、童話の本を読んでいたら、本はどうして作られるのか、知りたくなつたのです。それで、おじさんにお聞きしようと思つて——」。

私がそう言うと、おじさんは、にっこりしてうなずかれた。「それでは、まあ、おあがりなさい。おじさんも五年前まで、出版社に勤めていたので、だいたい知っているから、話してあげよう。二階へいらっしやい。」

おじさんは、新聞を食たくの上に置いて、階だんを上つて行

かれた。私もあとからついて行った。

二階のおじさんの書さいには、三方のかべに本だなが置かれ、いろいろの本がたくさんならんでいる。たなからあふれて、この間の上にも、たたみの上にも、たくさん積み上げられている。大きなテーブルの上も横も、ちょうど本屋の店先のよう、たくさんのおじさんの本でうずまわっている。おじさんは、一つの本だなかから、一さつの本をぬき出して、私の目の前に置いた。表紙に、「青い花の物語 青木修」と書いてある。中をひらいて目次を見ると、童話が十べんはいつている。



「おじさんのご本ですね。」

「そうだよ。去年の春に出した本だ。ぼくの童話の中で、花のことを書いたものばかりを集めたのさ。最後にある『すみれとめくらの女の子』という童話のほかは、みんな子供のぎっしに一度のつたものだよ。きつと、雪子さんが読んだものもあるだろう。」

こう言つて、おじさんは、その『青い花の物語』ができるまでのことを中心に話してくださつた。

(二)

「ぼくが花がすきなことは、雪子さんも知つてゐるだろう。ぼくはどんな花でもよい。じつと見てゐると、なんだか花に話

しかけたくなる。『やあ すいせんさん ゆうべはとても寒かつたが、元気かい。』などとね。ところがぼくは、むかしからそんなに花がすきだつたわけではない。四五年前のことだつた。そう、それは天気の良い春の午後だつた。その時、ぼくは物語の原こうを書きに、静かな山の中の温せんに行つてゐたのだが、なかなか思うように筆が進まない。朝からつくえに向かつていたけれど、さっぱり書けない。ぼくは、書けない自分にはらがたつてきて、ステッキをついて旅館のうら山へ散歩に行つた。ふだんなら春の日の散歩というものは気分のよいものなのだが、原こうの書けないぼくは、ただもういららしてゐた。ステッキで地面にはえてゐる草の頭をたたきながら、さつさと山を登ると、ちようどよさそうな所へね

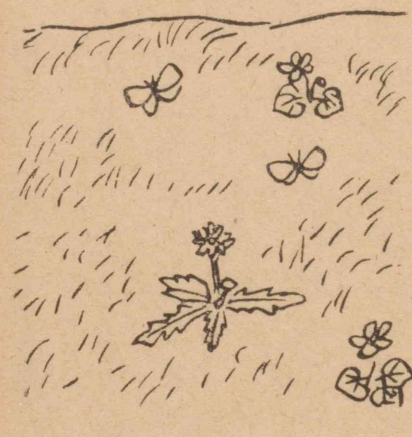
ころんで目をつぶった。よいにおいがする。ぼくはふっと目をあけた。色とりどりの野花がきれいにさいている。ぼくはまず、白い花をむしり取って鼻に当てた。次に赤い花を。次にむらさきの花を——。ぼくのまわりの花を、みなむしり取っては、においをかいてから投げすてた。するとその時、ぼくが登ってきた反対側の方から、かわいいらしい声が聞えてきた。

『おねえさん。すみれの花はどんな色をしているの。』

『むらさきよ。そうねえ。——空

の色よりもっともっこい色よ。』

『そうお。とても小さい花ね。た



んぼぼよりもずっと小さいのね。』

ぼくは、はっとして起き上がった。

五つか六つぐらいの小さな女の子と、

その姉——そう、ちやうど

雪子さんぐらいの女の子が、ぼ

くの十メートルばかり向こうの草

原にしゃがんでいる。そうして、

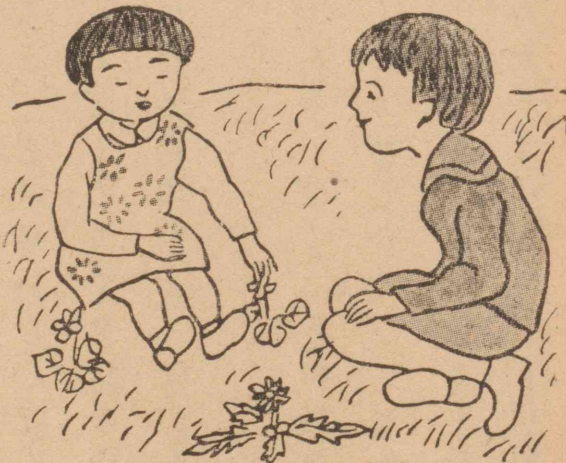
そのかわいい小さな子は、もみじ

のような指先を、そっと、すみれの花びらにふれている。か

わいそうに、めくらなのだ。ぼくはもう一度はっとした。

『すみれも、いたいいたいと言うから、ふまないように歩き

ましようね。』



小さな女の子の声だ。ぼくはあつと思つた。思いがけない所に立ってじつと見ているぼくを、ふしぎに思つたのだらう、姉はぼくの方にかかるく頭を下げると、小さな妹の手を引いて去って行つた。

もうそのあとは話さなくてもよいだらう。その時から、ぼくは花をかわいがるようになった。そしてぼくの書く童話の中にも、いろいろな花が出て来るようになったのだよ。話がわき道にはいったから元へもどそう。

このぼくの本を出そうという話があつた時、ぼくはその話をしに来たわかば書店の編集者と、いく度も話し合つた。どれとどれを入れようか、どんな順序にしようか、表紙やさし絵はだれにかいていたかどうか、活字の大きさはどれぐらいのものにしようか、などと相談した。本を出すからには、できるだけよいものにしたというのが、ぼくと編集者の考えだ。どんな紙を用いようかということまでも話し合つた。

ぼくの本を出した時は、そんなぐあいだったが、このほかに、出版社の編集者たちだけが計画する場合もある。たとえば、雪子さんのような小学校五六年ぐらゐの子供たちには、科学の勉強も必要だから、電気や機械のことをわかりやすく書いた本を出そうと計画する。どんな形の、何ページぐらいの物を、だれに書いていたかどうかと相談する。これを『編集会議』というのだよ。そうして決定した計画を持って、筆者にたのみに行くのだ。筆者は編集者からその計画をよく聞いて、いつまでに書けばよいかという『しめ切り』も聞いてから、『書きま

しょう。』とか、『ほかに仕事もあるから、しめ切りまでには書けません。』とかはつきり返事をする。いそがしくて書けそうもないのに、あいまいに承知することはいけないことだ。けれども人はみな機械ではないから、と中でいろいろさしさわりの起る場合もある。病気になって予定どおり書けなかったり、書き進んでいくうちに、初めの計画よりもっとよい考えがうかんできて、書き方を変えたりして、出版社と約そくした日までに原こうができ上がらないことも少なくない。ここに筆者と編集者との苦心がある訳なのだ。

ぼくの『青い花の物語』の時と、さきに言ったように、花のことを書いた童話の中の、よい物ばかりを集めようとしたのだが、気に入ったのが九つしかなかった。編集者はどうしてももう

一つ入れてほしいと言う。そこで『しめ切り』を少しのばしてもらって書いたのが、この『すみれとめくらの女の子』なのだ。それはさつき話した山の温せんでの出来事を童話ふうに書いたもので、ぼくがいく度もいく度も書き出しては、うまく書けないで、原こう用紙を破いてばかりいた童話なのだよ。あの小さなめくらの女の子の、『すみれも、いたいたいと言うから、ふまないように歩きましたよ。』と言ったことばを思い浮かべながら、一週間ばかり、毎ばんおそくまでかかってやっとな書き上げて、編集者がそれを読んでとても喜んでくれたのを今でもおぼえているよ。

——原こうができ上がると、編集者はそれをよく読んでから、その内容にふさわしい表紙やさし絵を、絵かきさんにたのみ

に行く、こうして、絵もでき上がると、こんどは『わり付け』という仕事が始まるのだ。

		明朝	ゴチック
青	青	青	青
14ポ	30ポ	初号	初号
い	い	い	い
12ポ	24ポ	1号	1号
花	花	花	花
10ポ	18ポ	2号	2号
青			
9ポ			
い			
8ポ			

雪子さんはよくいろいろの本を読むから知っていると思うが、本の中には大きな活字の『見出し』や小さい活字の部分があるだろう。ゴチック活字といつて、太い活字もあるだろう。そういう活字の大きさを決めたり、さし絵の大きさを決めたり、字と字の間や行と行との間や、また、どのページにはどのさし絵がはいるかをきちんと決めるのを『わり付け』といつて、この『わり付け』がちゃんとしてあると、本もきれいにでき上がる訳なのだよ。

『わり付け』が終ると、原こうは印刷所にわたされ、いよいよ印刷の仕事になる訳だ。実際に印刷所へ行って見るのが一番わかりやすいだろうから、こんどの土曜日に、ぼくの知っている印刷所へ連れて行ってあげよう。

(三)

土曜日の午後、青木のおじさんは、私を印刷所へ連れて行ってくださった。

「げさ、電話をかけたら、いつでも見せてあげると言っていたよ。『五年生のおじょうさんが、印刷のことを知りたいんですって。へえ。』なんて、おどろいていたよ。はっはっは。」

おじさんはわらいながら、わからないことはどんどんたずねなさいとおっしゃった。

印刷所に着くと、ゴーツゴーツという音がしていた。印刷機械が回っているのだ。二階の事務室では、大勢の人たちがいそがしそうに働いている。電話にかぶさるようにして大きな声で話している人もある。大きな声を出さないで、機械の音で声が消されてしまうのだ。おじさんも大きな声で、五十ぐらいの人と話している。まるでとなり合っているようだが、ふたりともにここにこしている。ふたりはやがて待っている私の方に歩いていらっしやう。私はおじぎをした。

「やあ、よく来ましたね。さっそくご案内しましょう。」

「ご主人が説明してくださいさるそうだよ。」

おじさんと私とは、そのご主人のあとについて行った。

二階の事務室のとなりは広いへやで、たくさんの人が働いている。女の人もまじって、原こうを左手にして、立てかけられた活字ケースの中から活字を拾っている。右の手が上に下に、右に左に動いて、弁当ばこのような形の木はこの中に、活字がたまってい。はこが一杯いになると、原こうといっしょに後の台の上に置く。あまりその動作が早いのでびっくりしていると、

「これは『文選』といって、原こうに書いてある字の活字を、まずここで拾っ



こう言いながら、おじさんは赤インクで「目」を「日」に、「半」を「午」に直された。

このようにして、一度、二度、三度と校正され、もう直すところがないようになってから、いよいよ印刷が始まるのだそうだ。

「こんどは印刷機械の方へ行きましよう。」

私はご主人とおじさんのあとから、階だんをおりて行った。

大きな印刷機械が二台と、そう大きくないのが六台あった。

大きい方は「輪転印刷機」で、小さい方は「平台印刷機」というのだそうだ。

「たくさんの部数を刷るざっしや本は、たいてい「輪転」にかけて刷りますが、ふつうは「平台」を二台か三台使います。」

「一時間でどれぐらい刷れるでしょうか。」

「そうですね。だいたい一分間にあの大きな紙で三十まい以上は刷れますから、千七八百まいでしょうね。」

「輪転印刷機」と「平台印刷機」とは、どんなところがちがうのですか。」

「それは、「輪転」の方が「平台」の十倍以上も早く刷れるのです。そればかりではなく、あれをごらんになるとわかるように、両面いっしょに刷られた紙が、本の形に折りたたまれて流れ出てくるでしょう。ですから、「平台」のように、かた面ずつ刷つて、また本の形に折りたたむ手数が省けるのですよ。」

私は、油で光っている「輪転印刷機」を見上げた。直けい一メートル近くもある、まるくまかれた白い紙が、工場のベルトのよ



少しはなれた所にある一むねの大きな建物が、この印刷所の製本場になっている。三十人ばかりの女の人が、そろいの白い仕事着を着て、せっせと働いていた。「平台」で印刷されたものがここに運ばれ、それを本の形に折りたたんだり、折りたたまれたいくつかを合わせて機械でとじたり、表紙を付けたりするのが、製本場のおもな仕事である。

『製本』も重要な仕事なのですよ。とじ方が悪かったり、のりの付け方がへ

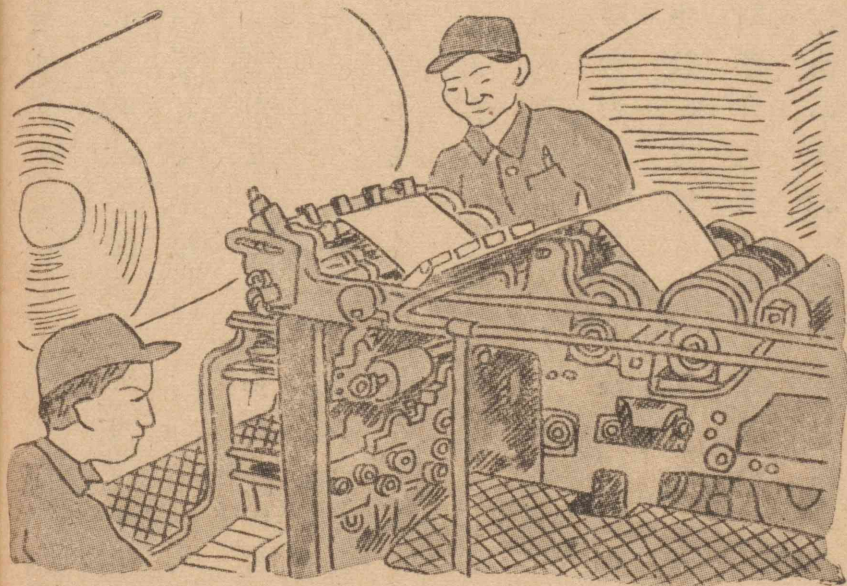
うに動いている。白い紙のうら表が機械の中ほどで印刷され、いつの間にか折りたたまれて流れ出てくるのを見てみると、この機械がどんなに複雑になっていたかがよくわかった。

「まだ製本が残っているよ。」

「さあ、行こう。」

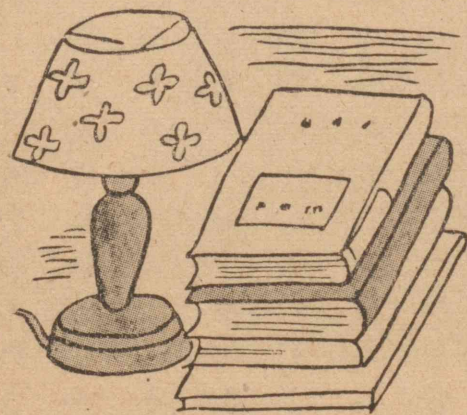
おじさんにうながされて、

私は機械のうなりをあとに外へ出た。



ただったりすると、本はすぐばらばらになってしまふのです。きれいに印刷したものを、じょうぶに製本することを、私たちはいつも心がけているのですよ。

製本場のすみには、でき上がった本が山のように積まれています。私は、日曜日の朝おじさんにお聞きした作家や編集者の苦心といい、きょう見せていただいた印刷所の仕事といい、大勢の入たちの努力によつて、初めて一さつの本ができるのだということがわかった。そうして、先生やおとうさんがよく、「本は大事にしなればいけません。」と言われる意味が、初めて本当によくわかった。



六 ことばと文字

(一) 音声と文字

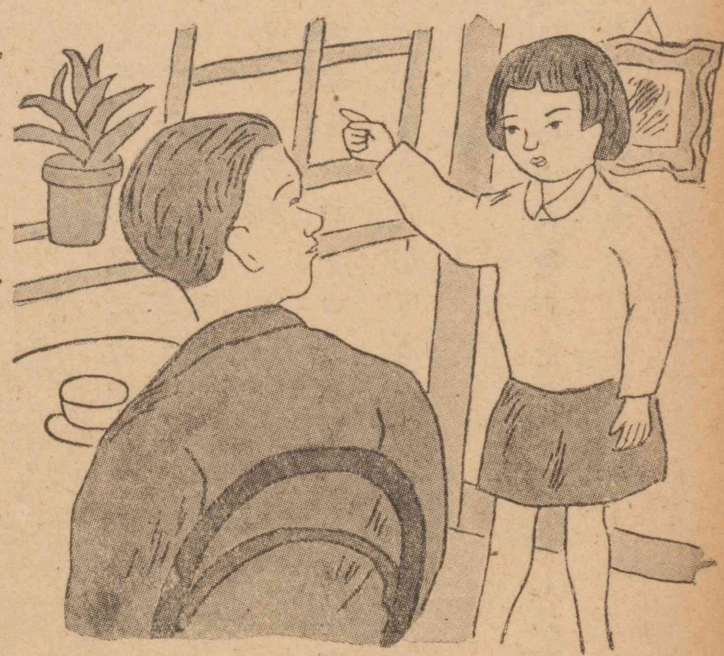
きょうは日曜日である。よし子さんの家には朝からお客があった。お客はよし子さんのおじさんである。おとうさんとおじさんは、しきりに話をしている。

おじさんはおとうさんの末の弟で、四キロばかりはなれた町に住んでいる。よし子さんは、おじさんとうら山へ散歩に行きたいと思った。よし子さんは、「おじさん、ご用がすんだら、うら山へ散歩に行きませんか。」とさそってみた。おじさんは、さっそく、

「ああ、行ってもいいよ。」
と答えた。

うら山へ散歩に行きたい
という気持をおじさんに伝
えるのに、よし子さんはど
うしたであろうか。「おじさ
ん、ご用がすんだら、うら
山へ散歩に行きませんか。」

ということばを使ったのである。そうして、そのことばは、口
から出した音で表わされている。人間がことばに使う音を音声
という。おじさんは、よし子さんの口から出た音声を耳に聞い



て、よし子さんの言おうとされていることがわかったのである。
また、よし子さんは、「ああ、行ってもいいよ。」というおじさん
の口から出た音声を聞いて、おじさんが散歩に行ってもよいと
考えていることを知ることができたのである。

おとうさんとおじさんも、口から出る音声を使って話し合っ
ていたのであって、このように、おたがいに近くにいたる時は、
自分の考えていることを人に伝えるのに、口から音声を出せば
よい。別に何の道具もいらぬ。

しかし、おじさんがきょうのように目の前にいないで、いつ
も住んでいる町にいたる時はどうであろうか。よし子さんの気持
をおじさんに伝えようとして、いくら大きな声を出してみても、
四キロもはなれた所にいたるおじさんには伝わらないであろう。

もし、電話があれば、口から音声を出すと、それがおじさんの所に伝わる。しかし、この電話もない時にはどうするであろうか。

よし子さんは手紙を書くにちがいない。手紙では、ことばを、文字を使って書き表わす。よし子さんの考えていることを文字で書き、それを手紙として出せば、ゆう便局の方でおじさんの所へ届けてくれる。おじさんは手紙を読んで、よし子さんの考えていることを知るのである。

このように、音声の代わりに文字でことばを書き表わせば、遠くまでも伝わる。また、音声はその場で消えてしまふけれども、文字で書いたものは、いつまでも残る。よし子さんの書いた手紙は、おじさんが破ってすてさえしなければ、あとまでも

残るであろう。私たちが文字で日本語を書き表わす場合には、ふつう、漢字と「かな」を用いる。漢字と「かな」を混ぜて書くのである。

いったい、地球上に住んでいる人間は、すべてことばを持っている。どんな未開の土人でも、ことばを持っていないものはない。人間が、ほかの生物よりもはるかにすぐれた働きをすることができるのは、ことばを持っているからである。

人間が、この地球の上に現われたのは、いつのことであったろう。確かなことはわからないが、ずいぶん古いむかしのことであるらしい。そうして、ことばは、人間が地球の上に現われると間もなく生まれ出たものと思われる。しかし、文字の生ま

れたのは、ことばに比べると、比べものにならないほど、ずっと新しいのである。

今知られている文字で最も古いのは、エジプト文字、漢字など、エジプト文字は、今から数千年前、漢字も、少なくとも三千年前には生まれていたらしい。

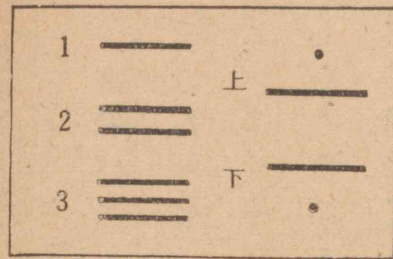
文字が生まれると、人間は、その考えを遠くの者に伝えることもできるし、後世の人に書き残すこともできるようになった。そこで、大勢の人が書かれたものを読み、それを元にして、その上に、一そうすぐれた考えをうち立てることができた。こうして、人間の生活は次第に進んだ。文字を持つようになってからの人類の進歩は、すこぶる目ざましいものがある。

(二) 漢字

漢字がどういふふうにしてできたかという点、「山」は、もと、山のそびえてゐる形を写したものであり、「水」は、もともと水の流れているようすを写したものである。「木」「人」「子」「目」「口」「手」「牛」「鳥」「魚」「門」なども同様で、これらのように、物の形をかたどったものを象形文字という。

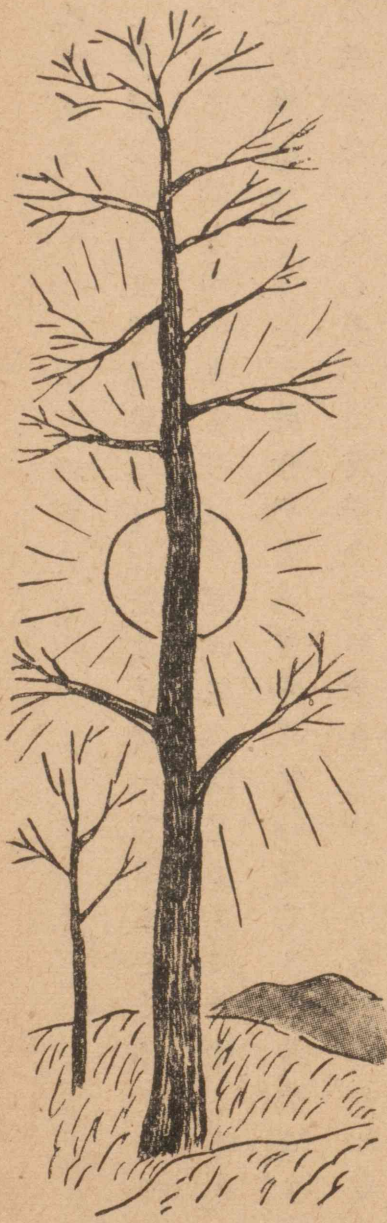


形のあるものは、その形をかたどって文字を作ることができ
 るけれども、形のないものは、この方法で作ることはできない。
 そこで、形のないものは、符号（しごう）のようなものを用いた。たとえ
 ば、「うえ」とか、「した」とかいう考えを表わすのに、横に線を引い
 てその上、または下に点を付けたものを用いた。「上」「下」という文
 字も、これからできたものである。また、1 2 3 などの数を表



わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたり、
 三本引いたりした。今の「一」「二」「三」もこれからできた
 ものである。「木」は象形文字であるが、その下の
 方に横の線を加えて、「も」という意味を表わし、
 上の方に横の線を加えて、「すえ」という意味を表わ
 した。

このようにして、いくつかの文字ができたが、これを組み合
 わせて、また新しい文字が作られた。たとえば、「木」を二つなら
 べて「林」としたり、「木」と「日」とを組み合わせて「東」としたり、「木」と「票
 とを合わせて「標」としたり、「火」と「登」とを組み合わせて「燈」としたり
 した。「林」という文字は、木がたくさんはえている「はやし」を表わ
 すのに、「木」を二つ横にならべたのであり、「東」という文字は、木
 の向こうに日が見えるという意味で、方角の「ひがし」を表わした



のである。

「標」燈などの文字の「票」登は、発音を表わす印として付けられたもので、同じ印のある字は、だいたい同じように発音される。この「標」燈のように、発音を表わす印の付いてできた漢字は、その数がたいへん多く、漢字の大部分をしめていられるといわれる。

この漢字は、千五六百年前ごろ、日本に伝わったらしい。日本で用いる漢字の読み方には二とおりある。一つは、「山」をサン、「水」をスイと読む読み方で、これを「字音」または「音」という。もう一つは、「山」をヤマ、「水」をミズと読む読み方で、これを「字訓」または「訓」という。字音は、中国の発音をもとにしたものであり、字訓は、その漢字に当たる日本語を当てたものである。

蚕	サ	ン	(字音)
	か	い	(字訓)
犬	ケ	ン	
	い	ぬ	
田	テ	ン	
	た		

旅	リ	ヨ
た	び	
港	コ	ウ
み	な	と
数	ス	ウ
か	ず	

たいていの漢字は、字音も字訓もあるが、中には字音はあっても字訓のないものもある。

職	シ	ヨ	ク
俗	ゾ	ク	
農	ノ	ウ	

また、一字で字音がいくつもあるものがある。「カ」という文字は、「馬力」の場合のように「リキ」と読むこともあるが、「全力」などの場合は「リヨク」と読まなければならない。「後」という文字は、「午後」「前後」などの場合は「ゴ」であるが、「後半」などの場合は「コウ」である。

「物」という文字は、「植物」の時は「ブツ」であるが、「食物」の時は「モツ」である。

また、一字で字訓がいくつもあるものもある。「間」という文字は、「アイダ」とも「マ」とも読む。「行」という文字は、「行く」の場合は「イク」で、「行う」の場合は「オコナウ」である。「生」という文字は最も多くの字訓があるもので、「生きる」の場合は「イきる」。「生まれる」の場合は「ウまれる」。「生糸」の場合は「キイト」、「生水」などの場合は「ナマミズ」である。

(三) かな

入の名に、「たか子」というのがあるが、この「たか子」を漢字で「多加子」と書くこともある。「多」という文字は「タ」という読み方があるが、「加」という文字は「カ」という読み方があるので、「タカ子」を多加子と書くのである。むかし、奈良時代には、まだ「かな」が生まれず、漢字だけしかなかったので、日本語を書くのに、漢字を使って、「多加子」のような書き方をした。たとえば、「冬」を「布由」と書いたり、「耳」を「三三」と書いたりした。

しかし、漢字は画が多くて書くのに手数がかかるので、もつとかなたんに書こうとしてできたのが「かな」である。

かなたんに書くために、漢字の画の一部分を省略するということを考えた。たとえば、「加」という漢字の右側の部分を省略して「カ」という文字が作られ、「多」という漢字の下の部分を省略して「タ」という文字が作られた。また「久」や「己」という漢字の一部分を略して、「ク」「コ」という文字ができた。このようにしてできたものが

加 加 加
 久 久 久
 己 己 己
 太 太 太
 知 知 知
 波 波 波
 か か か
 く く く
 こ こ こ
 た た た
 ち ち ち
 は は は

(四) ローマ字

ローマ字は、そのおおもとは、エジプト文字にあるといわれる。エジプト文字は、今から数千年前にエジプトでできたものであるが、それがフェニキアという国に伝わって、形が少し変わって、フェニキア文字となり、それがさらにギリシアに伝わって、ギリシア文字となった。そのギリシア文字がローマに伝わって

フェニキア文字	𐤀𐤁	𐤂𐤃	𐤄𐤅	𐤆𐤇
古代ギリシア文字 (西部)	Α	Β	Γ	Δ
	Α	Β	Γ	Δ
古代ローマ字	AAA	BB	CC	D
(筆写体) 現代ローマ字 (印刷体)	Aa	Bb	Cc	Dd
	Aa	Bb	Cc	Dd

「かたかな」といわれるものである。「かたかな」には、画のかんたんな漢字をほとんどそのままの形で用いたものもある。たとえば、「ニ」チ」という「かたかな」は、漢字の「ニ」千」から出たものである。また、かんたんに書くための方法として、漢字のくずし書きを一そうかんたんに行なうことも行われた。そうしてできたのが「ひらがな」である。

できたのがローマ字である。

初めのローマ字は、今の大文字のようなものであったが、少し後になって、小文字ができ、さらに筆写体の文字ができたのである。

ローマ字は、ヨーロッパやアメリカの国々で用いられているが、わが国でも、ローマ字を使う人が出て来た。

「山」ということばを、「かな」で書けば、「やま」や「ヤマ」と二字で書き表わされる。ローマ字で書けば Yama で四字である。このように、ローマ字は、「かな」よりもっとこまかく発音を写すことができる。

七 小人の国

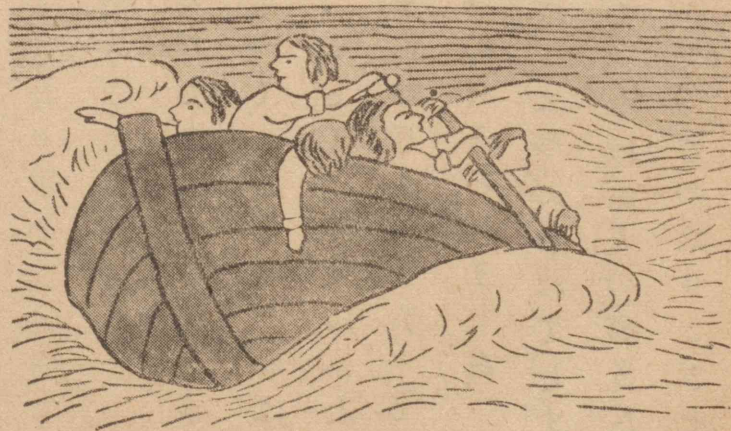
(一)

私の名はガリバーといひます。イギリスで生まれました。

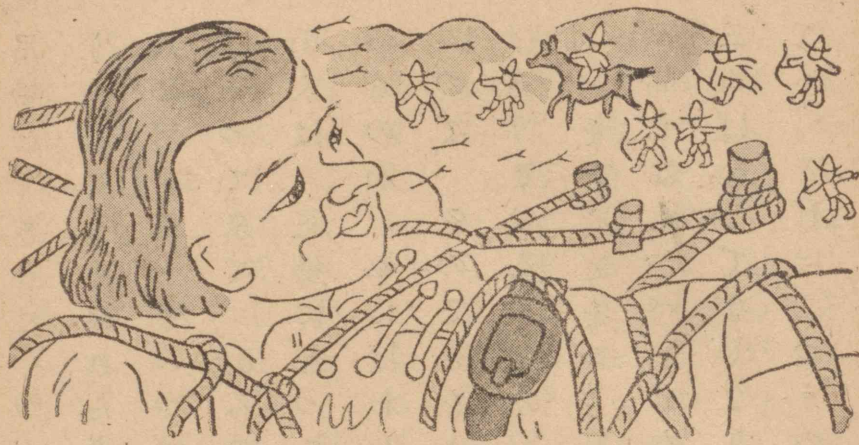
一度、世界をめぐるつてみたいものだと思つて、ある年、私は船医になつて、南の方へ航海に出ました。そして、非常にふしぎなことに出会いました。これからそれをお話しましょう。

ある日のこと、私たちははげしい暴風雨におそわれました。船は進路を誤つて、かくれた岩に乗り上げ、二つにわれてしまいました。ボートがすぐにおろされました。私は六人の船員たちといっしょに、一つのボートに乗り移つて、力の限りこぎ出

しました。けれどもボートは、小山の
ような波にもまれてしずんでしまい、
それつきり、なかまは見えなくなりま
した。私も一度はしずみましたが、ま
たうき上がって、波の間を泳いでいま
した。次第にからだがつかれ、手も足
もへとへとになってきました。すると
その時、足先がすな地にさわったよう
な気がしました。足が立ったので、水
の中を歩いて、ようやく岸に着きました。
私は、たいへんつかれていましたので、岸に着くと、そのま
まそこにたおれて、ねむってしまった。



何時間、そこにねむっていたでしょう。気が付いて起き上が
ろうとしましたが、からだは少しも動きません。ふしぎに思っ
てよく見ると、手足は、じょうぶな細いつなでしばられ、頭や
こしも同じようなつなで、両側のくいにしつかりとくくり付け
られていました。また、頭のかみもしばり付けられていました。
回りで、わいわいとさわぐ声が聞えますが、からだを動かすこ
とができないので、それがなんであるか、見ることはできません。
ん。そのうちに、何か足の方から登って来るものがあります。
だんだんと、むねの上までやって来ました。できるだけ下目を
使って見ると、身長が、十五センチあるかなしの小人が、ゆみ
やを持って立っていました。そして、そのあとから同じような
小人が、ぞろぞろと登って来ました。私はおかしくなって、こ



るほど、やはますます飛んで来ます。静かにしているよりほかはないと思つて、じつと、ばんまで待つことにしました。しばらくするとまた、からだの回りに、わいわいとさわがしい声がしてきました。たくさんの小人が、再び集まって来たのです。そのうちに耳の近くで、コツン、コツンという小さなつちの音がしてきました。そつとようすをうかがうと、小人たちはいっしょうけんめいに、高い足場を作っていました。

らえきれずにふき出しました。小人たちはおどろいて、みんなあわてて飛びおりました。しかし小人は、しばらくたつと、私の顔を見届けようとするらしく、またぞろぞろと、むねの上に登って来ました。

なんとかしてにげ出そうと、からだを動かしているうちに、つなが切れてしまいました。私は喜んで、その手で頭のつなをゆるめました。やつと、頭を動かすことができるようになりました。小人たちはこれを見ると、すばやくにげましたが、やがて遠くから、小さなやを、雨のようにいかけてきました。三四本、頭やうでや顔にささりました。思いのほかにいたので、こうしてはいられないと、私は、うでや頭を動かして、自由なからだになろうとあせりました。からだを動かそうとすればす

足場ができる、四人の小人が登って来ました。その中にひとり、おともを連れた者がいて、その小人が、下に立っている小人に何か用を言いつけました。すると、小人が四五人ばかりかけ寄って来て、かみの毛のつなを切りました。おともを連れた小人は、足場に登って演説をしました。もちろん、何を言っているのか、私にはわかりません。私は、おなががすいていた。たので、そのことを小人に言いました。もちろん、わかるはずはありません。仕方がないので、いろいろな手まねをして、やっとそのことを知らせることができました。

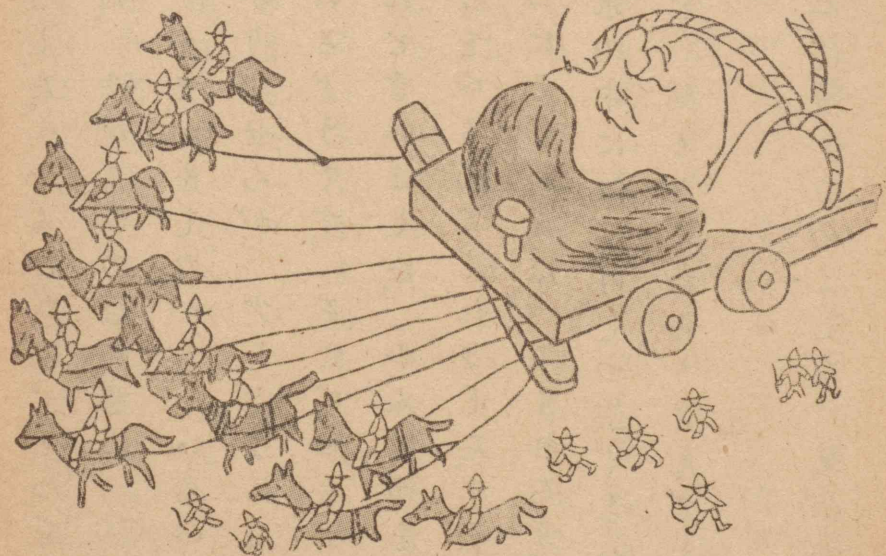
間もなく、パンと肉と飲み物が運ばれました。パンも肉も、三口ばかりでなくなりました。ぶどう酒の大たる二つ、といっても、それはふつうのコップに二はいほどしかありません。た

ちまち私は、それを飲んでしまいました。小人たちは、それを非常におもしろがって見ていました。やがて私の目の前に、ひとり、のえらそうな小人が現われて、手まねをしながら、いろいろと話をしました。たしかにはわかりませんが、少しはなれた大きな町に連れて行こうと言っているようです。そこで私も手まねで、からだを自由にさせてくれと言いました。小人は頭をふりましたが、それでも、少しつなをゆるめてくれました。小人たちはそれから、顔や手のきず口にこう薬をはってくれたり、水を飲ませてくれたりしました。水の中には、けしつぶぐらいの薬がはいっていて、それを飲むと、間もなくねむりこんでしまいました。

大きなくしゃみといっしょに、私は目がさめました。気が付

くといつの間にか、私は車の上
にねかされていました。その車
を無数の馬が、長い列を作って
引いているのでした。

そこは、ふしぎな小人国だっ
たのです。そこへ、とつぜん私
が流れ着いて、ぐうぐうねてい
たものですから、たいへんなさ
わぎになったのです。王様はす
ぐに命令して、私の中からだをし
ばりあげさせ、それと同時に、
私を乗せる大きな車を急いで作

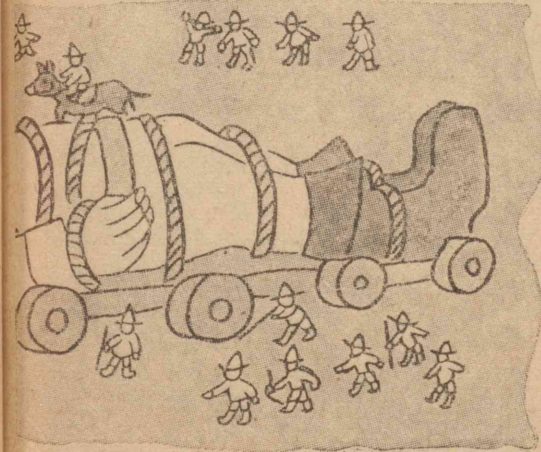


らせたのでした。その車は、長さ二メートル、はば一メートル
あまり、高さは十センチほどでした。

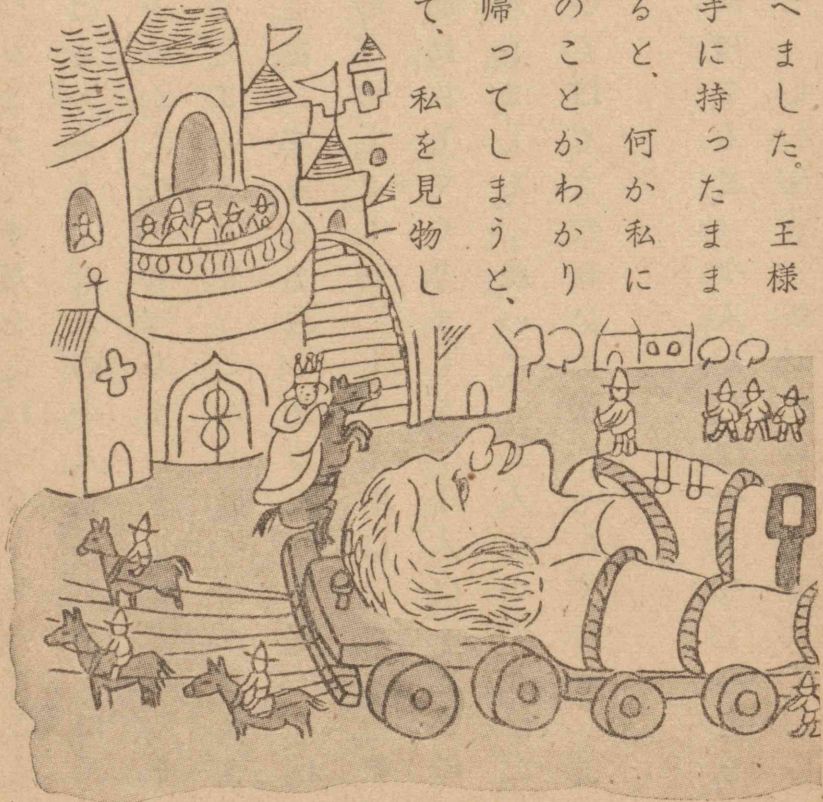
車ができると、こんどは私のからだを乗せるのに、大ほね折
りでありました。何百人もの小人が機械を使って、ねむって
る私のからだを車の上に乗せました。そして馬千五百頭に車を
引かせて、王様の住んでいる町に行くことになったのです。大
勢の番人がつきそって、四時間ばかり車に乗って引かれて行き
ましたが、その間も私は、ずっとねむり続けていました。どこ
ろが番人のひとりかようすを見ようと、私のむねに登って来て、
やりの先で、こっそりと鼻をつつついたからたまりません。大
きなくしゃみが出て私は目をさまし、同時にその小人はびっく
りして飛びおり、けがをしてみました。

(二)

町に着くと、王様はおともといっしょに、高い家の屋根に席をこしらえて、私をじっと見ていましたが、王様は、もつと近くに寄って見ようと、屋根からおりて来ました。馬に乗って、私の方にこようとしましたが、乗っている馬が私におどろいて、びよんびよんとはねるのでこまっているようです。やっこのことで馬をしずめて、王様はおともにかささやきました。間もなく、小人が食べ物と車を積んで、たくさん運んで来ました。私はそれを、



王様は見ている前で食べました。王様は、けんをしっかりと手に持ったまま見ていました。食べ終わると、何か私に話しかけました。なんのことかわかりませんでした。王様が帰ってしまうと、大勢の人が集まって来て、私を見物しました。中にらんぼうな小人がいて、いろいろな物を投げつけました。その一つがかた方の目に当たりました。番人はおどろいて、そ



のうちの六人ばかりをつかまえ、手足をしばって、私のところに連れて来ました。私はさつそく、五人の小人をポケットに入れ、もうひとりの小人をつかんで、食べるまねをしました。その小人はふるえ上がってしまいました。こんどは、わざと大きなナイフを取り出しました。するとまた、見物人は非常にこわがって、がやがやとさわぎ出しました。しかし私は、小人の手足のなわを切って、地面に放してやりました。小人はうさぎのように、飛んでにげて行きました。続いて、五人の小人もにがしてやりました。それからもうだれひとり、いたずらをしようとしませんでした。

ばんになってねる時間になると、小人たちは小さなしん台を、六百台も運んで来ました。しん台は、私にねられるように、ちやんとならべられました。しかしそれに乗ると、足の弱いしん台はつぶれて、からだは冷たい石のゆかの上に落ちてしまいました。

次の日も、見物人はぞろぞろとやって来ました。その日、王様のごてんでは、役人が集まって相談をしました。ある者は私をこのままとめて置いては、国じゅうの食べ物飲み物が、すぐになくなってしまふだろうと心配しました。そういう相談をしているうちに、私が六人のらんぼう者を許してやったということが、王様の耳にはいりました。それを聞くと王様は、たいへん感心したらしく、とうぶん、とめて置くがよいと言ひ、その日から私のために、食べ物が入り用なだけ運ばれました。番人も付けられました。それから、この国の学者がことばを教えて

くれました。私はまじめに習いました。そしてどうやら、少し話すことができるようになったころ、王様が私のところにやって来ました。

「王様、どうぞからだのつなをお解きください。」

私はまず、そう言ってお願ひしました。すると王様は、

「われわれに害をしないと約そくするなら、解いてやろう。その前に、あやしい物を持っているかどうか、からだを調べなくてはならない。」

と言いました。そこで私は、

「きつと約そくします。どうぞお調べください。」
と言いました。

ふたりの小人が足もとに寄って来ました。そのふたりをつま

み上げてポケットの中に入れると、ふたりは中をしきりにかき回して、品物をいちいち紙に書きたてました。まず、たばこ入れは大きなはこと書きました。はこのふたをあけて、ひとり的小人が中にはいりましたが、はいるが早いのか、粉にまみれて大きすぎです。急いで飛び

出すと、粉がぱつと散って、大勢の小人がみんなくしゃみをしました。次に時計が出ました。ひとりはそのを、きみような記号の付いているふしぎな玉だと言いました。そして記号にさわろうとして、ガラスのふたにやつ



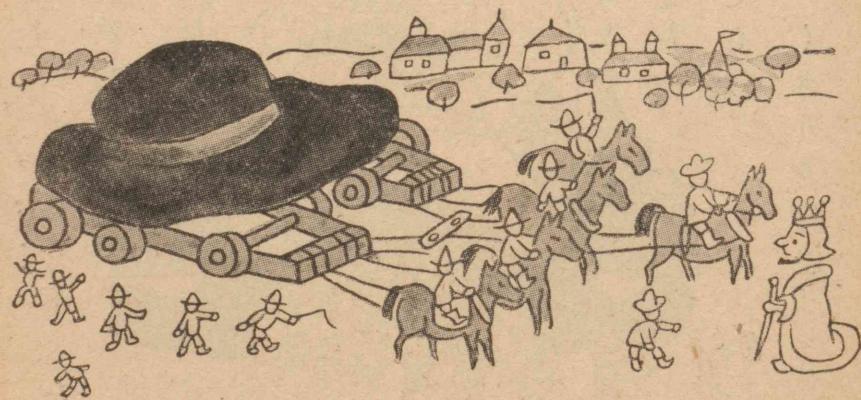
と気が付き、たがいに顔を見合わせました。私がそれを小人たちの耳のところを持っていくと、みんなは耳をふさいで、水車のような音がすると言いました。王様も、非常にそれをふしぎに思っ、学者たちに見させました。ひとりはそのを、神様にちがいないと言いました。ひとりは、たしかにけものだろうと言いました。次に私のピストルをなでてみながら、たがいに首をかきつけていました。そこで私は、王様の見ている前で、一発うってみせました。ドンと大きな音がしましたので、みんなはびっくりしてしまいました。

このように、私の持ち物はみんな、あやしい物とされましたが、中でも、ピストル、けん、そのほか二三の品物は、あぶないからと言って、取り上げられてしまいました。

(三)

日がたつうちに、だんだんと、小人たちは私に慣れてきました。やがて多くの子供たちが、私のからだを遊び場所にして、かくれんぼなどをするようになりました。

ある日のこと、数人の小人があわてて王様のごてんに来て、なんだか黒い、ばかに大きな物がある。あれもたしかに、あの人間の持ち物にちがありません。ここに持って来ましようかと言いました。



王様は、すぐ持って来るように言いつけました。やがて五頭の馬に引かせた車に乗せて持って来たのは、なんと、私のぼうしだったのです。

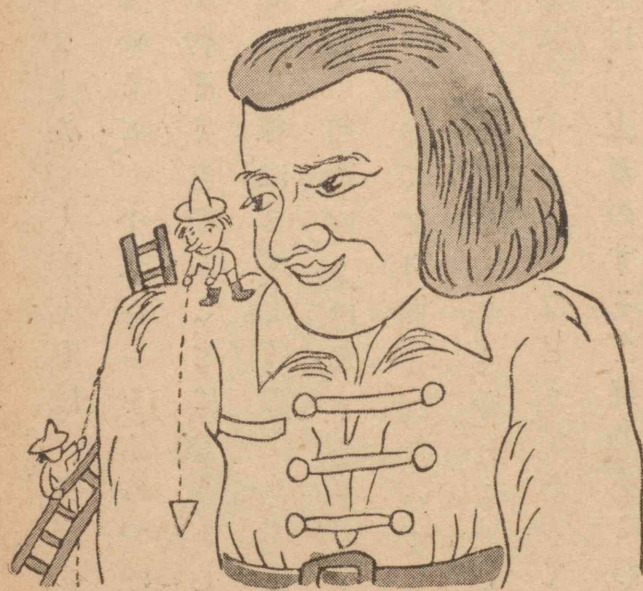
またある日、大行進が行われました。そのため、私は、

両方の足をできるだけひろげました。楽隊と旗とを先におし立てて、長い長い小人の行列は、私のまたをくぐって進んで行きました。なかなか、みごとなものでした。それを、またいで見おろしていた私の楽しさは、言いがたいほどでした。私はこの日、くさりを解か



れて、やっと自由なからだとなりました。しかし私は、王様の許しがあるまで、この国を去らないこと、小人たちをふみつけないこと、そのほか、いくつかの約束を守ることになりました。からだのくさがりが解かれると、王様はまず、町のようすを一とおり見るがよいと言われました。町の回りは高さ七十センチあまり、はば三十センチのじょうへきでとり囲まれていました。それはたいへんよくできていて、上では競馬もやれるくらいでした。そして三メートルおきに、じょうぶなとうがあつて、番人が見張りをしていました。私は、上着のすそで建物をこわしてはいけなと思つて、上着をぬいで歩きました。家々の屋根の上には、小人たちがたくさん登つて、町を通る私を見ていました。

そのうちに王様は、私に新しい服を作ってくれました。その服をしたるために、私をゆかにひざまずかせ、せなかにはしごをかけて、ひとりの小人が登り、首からゆかまで、おもりのついた糸をたらして、すんぼうしを計りました。それが上着のたけてした。こしの回り、うで、そのほかのすんぼうしは、自分ひとりでとりましたが、小さい切れ地をいくつか寄せてぬいませたので、でき上がったのは、つぎはぎだらけのふとんのようにでした。



(四)

それから私は、小人の国でいろいろなことに出会いました。ある日、海岸を歩いていると、おきの方に何かういていました。泳いで行ってよく見ると、それは大きなボートでした。私はそれを見ると、急に国に帰りたくなりました。そこで、そのボートを岸の方に引いて来ましたが、たいへんいたんでいましたので、いっしょうけんめいに直しました。やっと乗れるようになったので、私は思い切ってこぎ出しました。さいわい、通りかかった船に助けられて、私は、無事にイギリスに帰ることができました。

航 (131)	製 (112)	除 (90)	孝 (67)	歡 (41)	設 (20)	漁 (4)
暴 (131)	混 (119)	勤 (94)	接 (83)	資 (42)	術 (20)	農 (12)
再 (135)	未 (119)	編 (100)	写 (84)	格 (42)	算 (21)	夫 (17)
演 (136)	標 (123)	議 (101)	版 (84)	共 (44)	筆 (24)	温 (17)
解 (144)	訓 (124)	承 (102)	博 (84)	減 (56)	授 (25)	尊 (19)
神 (146)	俗 (125)	誤 (109)	富 (88)	義 (56)	許 (27)	經 (20)
守 (149)	略 (127)	複 (112)	興 (89)	故 (60)	念 (29)	厚 (20)
	己 (127)	雜 (112)	収 (90)	状 (64)	丁 (37)	衛 (20)

勉強の手引

一 みんなそろって

(一) 大漁

- (1) 船で帰って来る人もむかえる人もうれしそ
うなところを、この詩から見つけましょう。
- (2) みんなで船の帰るのを待っていたようすは、
詩のどこでわかりますか。見つけましょう。
- (3) 次のことを調べましょう。
船に積んだ「海幸」とはなんでしよう。

「大漁」の旗を船のどこに立てていますか。
この日の海のようにすは、どんなふうでした
か。この日の空のようにすは、どんなふうで
したか。

(二) まめ運び

- (1) この詩を読んで作者をどんな少年だと考え

ましたか。

- (2) 作者は、何がおもしろくなって足を早めた
のでしょうか。

(三) 私の日記

- (1) やぎが来て、みんなが喜んでいるようすを、
文からぬき書きしましょう。
- (2) いもほりの楽しそうなようすを、文からぬ
き書きしましょう。

(3) 次の文を比べて、どちらが正しい言い方が、
考えてみましょう。

先生は新しいバケツをさけてやぎ小屋へ
行かれた。

先生は新しいバケツをさけてやぎ小屋へ
行った。

(四)

炭ころのようすを工場へ

- (1) この文章を読んで、次の問題に答えなさい。

○「しゃんこうしゃ」たてころとは、どんな所でしょう。

○「きりは」では、どんな道具を使って働いているでしょう。

○「きりは」には「さき山」「あと山」ということばがあります。なんのことでしょう。

○選炭場では、どんな仕事をしているでしょう。

○炭ころの厚生部ではどんなことをしていますか。

○「きりはは、夏はずしい。この文の「すずしい」には、ことばの下に「しい」と付いていますね。このように、「美しい」と

○はやし立てて

○思い直して

三 発表会

(一)

かの発生

- (1) かがたまごからおにぼうふらになるまでを、五十字以内の文章にまとめなさい。

- (2) かのおすとめすは、どちらがうてしょうか。

- (3) 次の文を読んで、かなのまちがいを見つけなさい。

血をすっているのをちっと見ていると、だんだんおなか赤くふくらんできました。なんとなくむづむづしてきます。ぼくはコップをふせて、かをつかまへました。

- (4) 次の文の訳は、どちらがよいでしょうか。よいと思う方に○印を付けなさい。

か「晴れ晴れしい」とか、「しい」の付くことばを七つ集めてみましよう。

二 みんなの橋

- (1) この文を読んで感じたことをみんなて話し合いましよう。

- (2) 公一はどんなことから橋をかけようと考えたようになったのでしょうか。

- (3) 公一はなぜ木をけずって橋のたもとに、「みんなの橋」と書いた木ふたを立てたのでしょうか。

- (4) 公一が、きらいな算数がすきになったのはどうしてでしょう。

- (5) 次のことばを使って短い文を書いてみましよう。

○またたく間に

○みごとに

ほとんど死んでしまいました。

みんな死んでしまいました。

たいてい死んでしまいました。

全部が完全に成虫になった。

みんなすっかり成虫になった。

みんなすっかりした成虫になった。

(二)

三つの家

- (1) この「三つの家」を読んで、どんなことを考えましたか。みんなて自分の考えたことを話し合いましよう。

- (2) 次の文の訳は、どちらがよいか、よい方に○印を付けなさい。

どの家でも飲けいしてくれませう。
どの家でも飲けいしてくれませう。
どの家でも飲けいしてくれませう。

変な人が来たら、声を出して人をよぶ。

おかしい人が来たら声を出して人をよぶ。

いやな人が来たら声を出して人をよぶ。

- (3) みんなでこのげきのけいこをしてみましょう。けいこの時、

○声の調子や高さをどのくらいにしたらよいてしょうか。

○話の速さをどのくらいにしたらよいてしょうか。

○話をする時のしせいはどうしたらよいてしょうか。

○にわとりや犬やうさぎのしたくをどうしたらよいてしょうか。

- (三) あて名のない手紙

- (1) この文を読んで感じたことを、みんなて話

ように思いましたか。思ったことを、短い文章に書いてみましょう。

- (2) この詩の中に、「それなのに」ということばがあります。どんな時に使うことばか、例をあげて説明してみましょう。

- (3) あなたも、このごろのことを詩に書いてみましょう。

- (二) 冬じたく

- (1) この文を読んで、北海道の冬じたくのようすがよくわかりましたね。あなたの住んでいる所と、どんなことがちがいますか。みんなて話し合みましょう。

- (2) 次のことばはどちらがいますか。帳面に書いてみましょう。

冬じたくでとてもいそがしい。

冬じたくでいそがしい。

し合みましょう。

- (2) 小人たちは、どんな手紙が強い手紙だと言っていますか。どんな手紙が弱い手紙だと言っていますか。手紙のいろいろについて書いてみましょう。

- (3) ウォーカさんは、なぜあて名の人を熱心にさがしたのでしょうか。帳面に書いてみましょう。

- (4) 次のことばを使って短い文を書きましょう。
○義理一ぺん

○愛情と真心

○おそろしくのろい

○今さら

四 雪国

- (一) 冬がれ

- (1) この詩を読んで冬がれとは、どんなこと

考えこんでいます。

考えています。

母に洋子がたずねました。

きょう友だちの家をたずねました。

- (三) 雪

- (1) 「雪」の文を読みながら、次の問題に答えてみましょう。

○雪の結しよは、どうしてできたのでしょうか。

○雪の結しよを研究した人の名を書いてみましょう。

○防雪林は、なんのために作ったものでしょうか。

○雪だるまを作るのに、都合のよい雪はどんな雪でしょうか。

○積雪をどのように分類しているでしょう

か。

○雪国の農家が収入の少ない訳を、考えてみましょう。

(2) 私たちも、雪の結しようの絵をかいてみましょう。

五 本がでてくるまで

(1) 青木のおじさんが花がすきになった訳を、短くまとめて書いてみましょう。

(2) 「編集会議」ではどんなことを相談するのでしょうか。

(3) 本がでてくるまでには印刷にとりかかる前に、どんな仕事がありますか。順序よく表にまとめてみましょう。

(4) 平台印刷機と輪転印刷機とは、どこがちがいますか。

(5) 印刷にとりかかったら、どんな仕事がある

でしょうか。表にまとめてみましょう。

(6) どう写版の印刷は、活字の印刷とどちらがうか、調べてみましょう。

(7) 次のことばを使って短い文を書いてみましょう。

○筆が進まない

○いらいらしていた

○ふさわしい

○きよりに動かす

(8) みんなで文集を編集してみましょう。

六 ことばと文字

(一) 音声と文字

(1) 「もしことばがなかったら。」ということをも、みんなて話し合ってみましょう。

(2) 「おと」と「音声」とは、どちらがうのでしょうか。

七 小人の国

(1) ガリバーの旅行記の「小人の国」のお話が書いてありますね。

あなた方が一番おもしろく感じたところを、話し合ってみましょう。

(2) 小人の国の人々が一番ふしぎに思ったことは、どんなことだと思えますか。

(3) みんなでこの話を、紙しばいに作ってみましょう。

(4) この話をげきにするには、どうしたらよいか、みんなて話し合ってみましょう。

(3) 「もし文字がなかったら。」ということをも、みんなて話し合ってみましょう。

(4) 文字の書いてあるものをさがしてみましよう。

(二) 漢字

(1) 象形文字とはどんな文字でしょうか。

(2) 字音と字訓を、例をあげて説明してごらんなさい。

(三) かな

(1) どうしてひらがなを作ったのでしょうか。

(2) ひらがなの用いられる場合をしらべてみましょう。かたかなの用いられる場合をしらべてみましょう。

(四) ローマ字

ローマ字が使われているものをさがしてみましよう。

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田国男
編集委員 芸術院会員 岩井良雄
東京教育大学教授 岩淵悦太郎

国立国語研究所員 大藤時彦
民俗学研究所理事 上飯坂好実
東京杉並第四小学校校長 鳥山榛名
山梨大学教授 橋本芳一郎
東京学芸大学教授 望月久貴
東京学芸大学助教授 佐藤英男

東京書籍株式会社編集部

さしえ
装てい

大沢昌助

新しい国語 五年下

(小) 第五学年後期用校 小国五一六

昭和二十六年五月一日 印刷
昭和二十六年六月一日 発行 定価 円
(昭和二十四年十月十日 文部省検定済)

Approved by Ministry
of Education
(Date)

著作者 東京書籍株式会社編集部
代表者 藤田貞次

発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 山田三郎太

印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 山田三郎太

発行所 東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装てい登録中)



広島大学図書

0130449756



東京書籍株式会社

庫
50
756